源氏目案

下 おうみ

[V.3]

PL788
.4
.G43 G326
1654
vol.3
Copy 1
Asian
Japan
Case

LIBRARY OF CONGRESS

Z004551303

4

源氏国素琴第六

あ

一あらしく　めるむるゝ云心や　靈運　當遠　日本記

一あるぞ　不定ならや　一あくれるる　あくれるるや

なゝーろゝゝゝも云　あゝくれと云心や　あゝくうべきや

一あいるく　愛　一あちらゝゝう　為　愛情

一あるゞち　逢　一あへるく　敢

一あやし　怪　一あゝゝ風　吹ゝゝゝ云衣

のゝゝ哉　源氏のゝゝ　心ゝゝいゝゝ心ゝゝゝ

一あゝゝゝゝゝ　眷雪苦短日高起　後此君主不早朝

長恨哥

一あゝれゝ　禁中朝餉の間

そて二ちあり。ひてあ。そて。ゐ腦を洞るや。早朝。まいるや。常の供
ゐるにわらず神供や。着をいうたもうくるぐわてあるるぬ
つるや。つるく。着をわて。喜ぶこいくらあるくいうさわこいくら

一あるるるれ　仇敵　一あるるるびるるる　陳氏
こもうどの礼をるるるや　一あるるるしれど　あるるる
ごえるるるや　一あるぬ　不足。るぬや
一あるるるさ　あふ風るる面や。縦横るるれぐるや
一あぶく　あぶくるるや　一あやるる　強盗
一あるわて　当家　一あるるるる　あるくるるや
一あま　音いられあるて。皆ハ髪をするず。大るのるいぐるぐ
るるてあるたるや。ぐあるまもあり。皆するてハなし

一あいかぶれこと　あちさうなこと也
一あくうれ　あこうな也　一あくう　珍敷（ごさ）　わろ心也
一あちこちな　ふれまはるなどや
一あへます　あやうなうや　あく地と云ふあやう沙也
一あざれ　されうな心也　一あくまで　不定（ふぢ）なこと也
一あへうな　八雲うゐうくひくびようなさ心也
一あさましきこと　俗（ぞく）にあくべきさいふ同し　あくまな也
一あざむき　詐（いつわ）せざあうな心　一あいざやう　愛敬（アイきやう）
一あやめもしらぬ　綾目（アヤメ）地のなきあれのふれめをな也
一あかう陵　うまうさされ心なり
一あうさ　饗（きやう）や　あうさいとも云あや

一あてこう　あてやうこうこう　さ心や

一あそん　紀氏や　紀寺とあげて　ほのぼのとみや

一あてべ　貴人や　一あこ　陪ま　我ま　小えとえよ

とを　ありてあこえや　一あこうけー　あつくさ人

の心あこえとえや　代々ーはよひれてつる　ひくひく

うけーあぐ云ぐぐこ　受る多

一あやうく　あいうくや　一あさこう　あくこうるえや

一あくこう　阿闍梨　安恵内供奉　慈覚大師　弟子　天台座主才一

五、始補　阿闍梨

一あこうて　こぐこう心や　孟津　尉心

一あ　あさ露の　源氏のいそざむふ　ふ　息子　心こうこと

主人のよひうや

一あかい　来内や

一あかうまそてく拍うう　まそて人をいさむるさ陽や

一あしうれ露よくちるも　朝露（アシノツユニ）　貪名利（サマリヲムサボルヒト）　多陽愛（アヤスンヲ）

白氏文集

一あつうう　諸院（ショサン）　別当（ベットウ）あづう

一あいぐれうう　あいうしそも

一あしそそくく　そをあゆお

一あうれのうもそげさう

一あさむれ　敷（キ）ざまれど　つもしさる

一あるうこ　宛賢（アカニコ）　あかるる

一あうそてまうう　阿伽（アカ）　梵語（ボンゴ）

一あさ心　まの詞よ　雅俗（ナニハツ）　平

や水心　翻（ホン）ずるや

こうべそのそんるうふけるるんまげをやせうな

哥(うた)も心も遠(よう)ざうをもうけもろくこのうち

一(ひと)あ(ア)ら(ラ)ま(マ)し　其(その)の紫(むらさき)もろ松(まつ)をそ(ソ)ゝ(ヽ)ろ松(まつ)浦(うら)

こゝのうち・こゝに立(たつ)ぞ・これゝ立(たつ)ぞ・ゝんもそ

一あ(ア)ら(ラ)ゝ(ヽ)　お(オ)前(まへ)の為(ため)ぞそ(ソ)ゝ(ヽ)ろ(ロ)ゝ(ヽ)せ

一あ(ア)ら(ラ)し　勿(な)れせ　一あ(ア)ぞ(ザ)むさ(サ)あ(ア)ろ(ロ)ゝ(ヽ)ゝ

ろ(ロ)ろ(ロ)ろ(ロ)

ゝあやぐろさい亜衣れ下ゝそゝろ物也

一あゝゝゝゝ　ゝをゝん低い女中侍ゝたゞふゝれを恨ゝも也

一あゝぎゝゝゝをゝゝ　和泉式部（いづみしきぶ）が名記（なのき）ゝ人の扇をゝゝ

ゝゝてゝゝ物ゝ。東坡（とうば）詩（し）云（く）摸扇（もうせん）惟逢（これあふ）春夢婆（はるのゆめばば）ゝ作（なす）ゝ。美

婆婆（びばば）ゝ女の異名（いみやう）也。唐土（もろこし）ゝ史女（しじょ）の物（もの）ゝ扇（あふぎ）ゝゝゝ。

扇（あふぎ）をゝゝゝゝゝ也。合歓扇（がつかんせん）などゝいゝゝ

一あゝさいゝゝゝゝゝゝゝ　清女（せいぢょ）納言（なごん）枕草子（まくらのさうし）ゝ

和（わ）の三ゝをゝゝれの扇（あふぎ）ゝゝよめれば絵（ゑ）ゝゝゝゝ

あゝ方（かた）ゝ二枚（にまい）つゝをゝゝゝゝ包（つゝ）ゝ糸（いと）ゝゝゝゝ

あゝび給（たま）ゝゝゝ

一あゝゝゝ　ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝれ山ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あづさ

一あづさゆみすえつもりてひくとだに花
　　九庫ハ唐庇檜柳
庇毛車ホいられ狭柳ともよめり居眉半部細代おろし
皆あづさをもちゐて今ハ息有のあづさハいづれも定
　　居眉よ、お代末濃のトすゑれをうくあづさ弓車ニハトすゑれ
をもちゐべし女房の常用するハ八葉の車ニもトすゑ
ずれをうくるよりいづれもお遠うべし
一扇のつま代みて狭前のくるまにうつりやせ
一あさごろもきてぞ田ごハ沼
中れあるにもうつろはせ水もそこひなき山田のそうげを
めうし心よしとや
文選平山之女朝雲暮雨行雨

一あれむまごろうぞ　中宮へ引給也　寶亀六年正月七日天皇御楊梅院安殿設宴於五位以上既而内豎進青馬略之而河海ニ委

一あよれちさ　は物狂ひ一誘迷

さ・後成卿女やそるれうもませ・消のこもづむ也

一あけめ我の心まごれ　愛の給也

一あさり　求食也

一まさ人のあるそらに　琵琶行

長安倡家女・掌学琵琶於穆曽二善文善ク長色衰ヘ身為商人婦

一おそびらも　捷也敏ク

一あけまろれ　童の馬手飼也　又の給也

一あべのおほしろ　安陪多　竹

一あらいろまさごぐれのくらし

も物紙ニ略ス

一 童女の上着 袖や 水手 なども袖や 赤地の乃
至 桜 ぼかしの 紅葉 紅梅 白梅 三つ重ねの 肩袖や 白
地 ぼかし 紅葉 白梅 三つ重ねの 袖や 裏 紅葉 白梅
一 あまびえ そでこのもや 三歳まで 用て 袖口 裏
おろしや 天児
一 あまびえ 史
一 あまびえ 人のうえ 着 ぼかし 紅葉 白梅 三つ重ね
何のいと 忌心 なき 袖口 一 あまびえ 化粧
一 あまびえ 袖 一 あまびえ 着 ぼかし 紅葉 白梅
六位の 緑の袍 あまびえ 着 ぼかし 紅葉 白梅 文 脱 ぬれ
ども 着 ぼかし 紅葉 白梅 地下へ 近く 候 時 元 一世源氏 ぬ
も 雑袍 位下 ぬれば 袖 袍 着べし 元服 条

一おぎかいくろこと　学生の入学の時、文章院の堂監を書くる
をゝ名簿にあるかを書也。聖廟は字は菅三、三品清行卿
は三位とかくち、夕雲の字も添ることなるべし
一あめのまうすこと　こゝをそらめは天照大神にてまします。宣人もさる
ほい天人也。舞姫を云
一あけずちの袍　舞姫の装束。
丹日は赤色唐衣。寅日は青色唐衣。辰日は青摺唐衣。赤紐日
蔭髪ぬや。青摺ぬや。源氏の表文やうなる衣日
のうへのきぬは青摺ぬにて。お節会色々書くるや。青ざうの紙は。
蝋ぜうの唐紙
一おほいのうへはうくわんの
物下袴装束。面は普通也。裏は猩々。青色は麹塵共書
一あれこもあらぬ我こもあらぬや。心もざひや

一あしこべそこづこ伝　蛭(ヒル)よい文母(フテ)よ捨てられしまを　おごの
男のふるようそへてよいう　一あさ芸田のふいみれそうあれ
海賊(カイゾク)い大波(ナミ)よこう見そうろうやあさ芸田(ゲタ)あれ　白(シラ)やうるあれ
やこうさういわうい紅のういわるまや
一あふうろうろう　奥(オク)のまや　行くいあるるやあるるいまう
るや　昔やうれ(ヨ)ま(ヨ)ま(ヨ)ま

一人は菜緒冠麹塵開腋袍白下袴着深沓持白杖両宮
一人は菜杖云青色麹塵袍白下袴半臂白石帯深履綿
一人は花白杖今菜杖ノ青衣ヲ赤クシタルヤウナルヲ着ル
一人は賀斗ト袋持ツ三人ハ揚袍ヲ着スルヨシ云ヘリ
一人ハ弦ヲ持ヤ幕童ハ絲鞆ヲ着ルヨシ云ヘリ
一あくう胡床ヲ日本記ニあくうヨシアリ采人ノ座ノ腰カケ
ヲ云ヘル今モ詞ニ有ルヨシ胡床ヲ云ヘリ
一あかゝゝ心ゝゝゝゝゝゝ
一あれゝゝ あんのゝゝゝゝ
一あをうなすそごのも 櫻ハ面萌黄裏青也すそごハすそを
紫ニ濃ニスルヲ云ベシ
一あいぶらるゝ 愛遣ト書世俗
あいそをつかすト云ヘリ
一あそんやそれあち菜ヲゝゝ

落胤(ラクイン)腹(バラ)也

一あるへきところを拙(つたな)あまつ

のきこうや

一あるいは(哥こゆるさ)　日(ひ)々異名(ことな)也

一あるいは(哥なくる風)　歩行(あるき)也

一あるいは(古)ごろひとろごろ　ひーおいぐれこころへて

ひ哥そこ心うべし　脇(多)者の衣そ内大臣(おとゝ)

一あさ日さす　天子を初日さすや　実(ミヤ)仕(ヅカ)へ奉(マツ)りて我(ワレ)を忘(ワス)れ

一あさなれ(哥枕ことば)　みるべき月(ツキ)・色(イロ)を

一あれまひのきめき　哥(ウタ)問(トフ)ふれきめきや　綺(キヌ)

ふるも織(オル)る問(とふ)のきめきいふやうや時(とき)

風流の時用(もち)ゐ指(サス)也・合(あは)一揆(せ)也

一あふれあそび　裳(モギ)着(き)これ袴(はかま)きるもの

一あてうるゑ　あてでの文様（モンジ）を
也（ナリ）水石鳥などのうるつるを言（イヒ）もの
一千夜（チヨ）のうるつ　名也　俗（サバ）馬糸の事也　芋（イモ）
よてこそと　弁（ベン）慶持うるそれぞ
地をまけぬれどそこそ云心也　それを
ぬやれあるえ名を云
ぬぐけ　いぐさやうの代（シロ）もの　ぬぐけ
一平（ヒラ）
あさみどり　浅（アサ）緑（ミドリ）の六位（ロクヰ）袍（ハウ）うち　さい四位（シヰ）也
一あをうるあをきうるぐるこ　白橡（シラツルバミ）二文字（モジ）あをうるこ青（アヲ）文
あるさい赤（アカ）文字もつるぐるこいつるうるこ　此（コ）名をえうるいと
き（キ）浄（ジヤウ）瑠璃（ルリ）也　寛（クワン）平（ペイ）代（ダイ）童の装束をいつち　古い赤文字
もうれ下（サ）ぐれ　古い赤文字をび（ビ）深（ブカ）の下ぐさ也

一わかくあるをごと　秘曲（ヒキヨク）ごとのごとし

一あづまうた事ども一ツ二ツ　謡（ウタヒ）ひて　音（ネ）ぶえあるごとし　琴（コト）の

一あるこめるふうにて　老者（ラウジヤ）のごとし　雨ぬべし

一あるこうるうるもの　一あるごとくるるもの　浄土（ジヤウド）ごとし

一あるいはれ（ワルイト）あるれのごとく　あれといふるれし　車のごとし

一あづまあそびの　神系（カムケイ）の名也　和琴（ワゴン）也

一あぜうびのあそびにて　折琵琶（ヲリビハ）の面（オモテ）に張（ハリ）うるごとき也

一あそびのごとくして　其外（ソノホカ）伝授（デンジユ）等（ナド）也　書籍（シヨセキ）等

八葉硯（ハチヨウ）の名也　ごとく　摸（アシラ）ふ

一あるあうくうすく　ぶえのごとくうち

一あるごとく物のごとく　其（ソノ）あるごとくいうごとく也　毛毛（ケケ）八濃（ニキヨ）き

うしろやうな

一あうさうろせ　上代のうな

一あうさうろだこ　なのうへよあをさあうさうろだこよ泊と

一あうれさゆりやうて　せ皆不寧国知水沫泡煙　法花経

一あうさうろさひうさうれのうちて　みうの蓮花せ

一あさ客のうれう祖　令れうをのうち

一あうのけのみゆうを　ひ衰のあうこうるせ

一あうう紀馬ようけ　後馬　移の歌い泊方れ糸馬よくや

一あうれ会　仏よ時花とてけうの花をなるせ

一あるんひうう　大論云釈迦仏入涅盤之後阿難奉高座一結集法蔵之時其形如仏仍衆會疑仏尊出給阿難未證涅槃之人

や仍阿羅漢ホ不用之其時阿難自然現瑞

一哥竹川 あそれてふ 妓(ヒメキミ)ありける人は 今をときめきいるやなぎすとも
一哥そ(ひめ)ありたえて 八家(ノミヤ)世氏うぢ氏宮(ヤド)をうち入(シン)て 真実心(ニッ)のもむろん(タケシン)
一よいあくねざめ 一秋のまつ 雲(キ)まより七日(ツ)このき(ミヅ)
念仏(ネン)や 一ゑ明の月 十六日(アリアケ)淺いろ明(カシ)
一へ〻匡房(タヽ フサフヽ)縫(ショウ)日本記(ニホンキ)は十六日(アリアケ)淺い暁月(カシ)と号す
一おもきもの(ヽ)で 扇(あふぎ)なんどゝ(ヽ)ある(ユヘニ)ゆへ 書(カケ)ず ひもとく
ひ(ハウ)方や 月隠(カクレテ)ノ 東山(ヲ)ノ 峯(タテ)に 聲(ヲ)ノ 論(タテ)之 朗詠
一哥 あさぢふ まことに(シヅ)心(ヽ)を 治(ヲサ)まる 名(ナ)也
一あづま(アヅマ) 細代(ガウ) 江刕田(タイカミ)とうもれ うををわら
おろ(ウヘン)ま(ヽ)の系(ヽ)
一あづま屏風 昔(ムカシ)ノ 皇(すめらぎ)ノ(ミ) 御(ゴ)ト 宸筆(ビョウブ)
漆(ウルシ)ま(ヽ)ノ 骨(カタヲモテ)ハリ 下(ト)ノ(ハ)ヒ 地(ヂ)を張(ハリ)て 細細(アヒ)と 図合(ヅ)せうち地(ヂ)ち
漆(ウルシ)骨(ホネ)片面(カタヲモテ)を張(ハリ)て 細細(アヒ)と 図合(ヅ)せうち地(ヂ)ち 邊屏風(アヒノビョウブ)さへ五

又ひあるころ兵庫に云ひ拘ふる車ひあるころ行をくるころ拘ふ
一あげまきな　大柔とやうひあひ交ひ心ひ儕る柔の事と云て語る
一あづさ　踏宅　文選　ゆるさうしてみるろぶとある
一秋さうろ　秋よりうろも遊びうろまで行ひ出てと行ふ心也
一あてひてと　実ある心也　一あうまぎれ　朱絢也　花鳥番
一あるこれひぎり　花柿下記傍正美濃・紀者山十二年山をいぞ
暗がりの帝者行をとさうろ行て　問候ひ　傍教十禅師の神をこれ
うろと云
一あ風いらうたるん　寝衾の新造
一あうろといふ拘　傍泥　勘ふる也
一あそうろ　浮舟の方をとぶらひ　明日ひ参也　式参ひ日宅治院して
傍教浮舟をこ付し也　一あうぶめり　亭をめくる也

一 おくれゐる おくばせをせうこひさんと云ふぐらゐ
なるべし
一 おもひそこなひ 精螻
一 おぐらやま 歌名所 なべおぐらやまと云心なるべし
一 秋はぎの 山野へ遠のべにそよぐ秋風のごとくなびきやすきこと
一 あさ衣 きぬ 放免の袖也 あさ衣ゆふだすきにて
急ぐとなり
一 あしたづ山 歌名所 夜山也
一 あいそう 愛敬也
さ
一 さうし 書司 唐也
一 さうそう 賢きこと也
一 さうそく 葬也
一 さうぞく 装束也

一さびしさや　河寒

一さゝめさ　耳言　万さゝやく心や

一さいさやうの　さういふ心　一さそう　さそふや

一さゝう人うつゝのようをさ　一さえ　女や

一さゞるゝて　恋や　一さみしさまさりて　侍とく

一さゝをあぐめさ　添のれ心よい

一さゝをあぐめさ　添のれ心よい

るびしやすさ人ゝれ心とあるさゝれ年よるようさゝしおう

さ、けっとさぜれ年よってさすてこゞれみる心いろゝ

云心をさせてうけて　一さゞゝ　洞のさゝ出る心や

さゞゝさ袖ゝけるれ哥ゝ聊うやそれうさゝあさうての心や

一さゝあみめさるゞれ神や

一さゝもさうもや　一さゝそさうでや

一さゝすゞ　流石　一さうじそな人のうや　四

身をしめや　一さうれこと　菊や。常乃十三

絃の琴や　一ざれこそざれさうや心ろ

一さすゝめん　龍鐘や、おちぶれさうろ

一ざうじう　雑変ホ　ざうくのうや

一さゝうれ　蹉跎　ひろまいひろじ云ふ　四

一三史五経　三史ハ・史記　漢書　後漢書　又經ハ毛詩　礼記　尚

傳　尚書　周易　一さうまうにや

一ふ月のきち　文月　皆天皇菖蒲のうら伏うり。武徳殿

行幸ゑ。内弁　ひん　参會のおし。宴侍首献菖蒲　内侍

女義人(クラド・シヨクイル)纏(ミシン)命縫(ヌヒ)を辞(コトハリ)居(ロクフ)るあり(キシヤ)一献終て六府騎射乃
ものあり
一さて〳〵げよと同也そうろうや
一さぐやうちうそれ許や細(さぐ)く許
一そうろうて如(かく)そうろうてと同〳〵ござそうろうや
一そうろうさるれいそうろうべや
一さりげ(うそぶ)なく遠(とと)げけるや
一さりげ(うそぶ)なくござる人のことをうめ
やうのすぐるや
一さぐわざ髪(かみ)のさうろう様(さま)なり
一さうろうげいいそうろうそうろう風や
一さうろうそうろうやうなれどや
一さうろうべき人でいそうろう外(ほか)紀(き)の事(こと)や
一さそれ(たゝ)もとつて指(さゝ)そうず中車乃

一さる程の寺ぼちのむすめ

前播磨守護也・ぼち新發也　和泉心の寺也・明石入道也

一さるほど　去程也・近比也・万葉ノ中ニ　此ノ字ヲ　ころ比とあるも

一さいつ比ぞ　さいつ比ぞ　一さいつ日　河曙

一哥 さゝぐさゝ　ゆづるさゝ　さゝらや

一さゝれもえ　筆　　一さゝすさゝろ　ささひのさゝろ

とゝや　中さゝも中ゝや　一さゝゝゝろゝて　唐ささゝゝ

へゝや　　一さゝゝら心あり　はゝの月い紫

いろよ心もろさ人もれがゝさもてあそび扨と深の心や

一たゝ淡門のめと　淡のゝと　あ人あり　男士　大武　才士　名淡門や

一さゞごさ　さろべさゝや　一哥 さゝゝわゝ　ゝゝの星も月い

ろねごゝと　人さゝれ山ゝでいろゝ扨せゝと　女中侍の君あゝゝゝろ

ゝろゝ心や　人さゝれ山ゝ　松馬の名有ゝれず　宵い月の入山や

一されろゝろ　名礼寝南吋よ扨せゝひさゝゝろゝさゝれ心や

一さゝろ　おまや　さろあて　ゆさろゝやゝや

一さうひ　競馬（くらべうま）
一左近（さこん）の陣（じん）　今（いま）はひごのくにへ　鬼（おに）のあくさ人（にん）めぐ——
一さもおぼしめさず　おひ一ぱの句（く）ふところあり　表（うへ）ざうし来
つひにそのそうをめぐらしくふのふうも
一さうや　されどそこいふ句（く）ふ
一宰相（さいしやう）のつぼね　参議（さんぎ）従（じゆ）四位（しゐ）下（げ）行事（ぎやうじ）延喜（えんぎ）十六年（じふろくねん）亭子院（ていじゐん）法皇
御十四賀（ごじふしがが）承行（うけたまはりおこなふ）慶除（けいじよ）忠（ちう）　長明（ながあき）参候（さんこう）之（これ）　大弁
一さんざーこうて　参（さん）ざ　参（さん）が
一さんのくち　手（て）　弘徽殿（こきでん）南（みなみ）のほそどの　局（つぼね）　もち　三位（さんみ）中将（ちうじやう）也
一さうしうしろにかくれゐて——　此（この）句（く）作者（さくしや）　巻（まき）ものとおぼしき
此（この）今栗（いまくり）　物（もの）　二百（にひやく）　おもて　心（こころ）

一 さいだいじんのぶつしょくをゆるされ、ぶんいをそうするはやくらをもちものにえ、ぶんいをそうするものあり、これいてんぐうえのぞみあるゆえ、官の許を用ゐず、ぶんのごとくに西向きさうしきに葺かうをつかうもよろし

一 政事のおのおの一日に政事ト定ハ去ることあるべきやいかん

政事ハ一日に二度ならでハ則明辛い辞行のうあるべし

一 政事ハ代ハ一ねんごとに改むるや、半年に改むるや、

政事の卜定あるべし、政事の起ハ、天武天皇廿五年丙辰三月、依神宮託宣奉祝伊勢国五十鈴河上に斎宮を建給ふ是政事の始也 河海抄

一 政院 嵯峨天皇、弘仁元年置政院司二皇女有知内親王ヲ

廿文野
廿一 爲二決王一 神皇式云。允恭皇即位定二賀茂大神一決二王卜一
簡内親王一 嫁者卜定 一云。或説云。伊勢ノ神ノ御ノ心也

一説云。其ノ後門ノ号ノ事 左衛門ノ号ノ事ハ。伊勢ノ神ノ御ノ心ニ
依テ。定メラレテ後門裏ノ役ノ儀ヲ定メテ。初テ決ス号ヲ
ラルゝ事ヘリ。号ヲ給ルヽ也。是ハ左衛門ノ号ヲ
改ラルゝ後ノ事ヲ云リ。
数隆ノ説云。伊勢ヘノ下向ノ時ハ。左衛門ノ尉ノ
分ニテ下向ス。其ノ間ノ事ヲ定ス
ル也。其ノ内裏ノ儀ヲ始ル也。
左衛門ノ尉ノ事ハ。近衛ノ将監ノ限リ。左衛門ノ尉ノ内裏ヨリ一町ノ
ホドニテ。近衛ノ将ノ御ノ限リ。左衛門ノ尉ノ東廂屋ニテ拝ヲスル事。今絶
タル也。或説云。左衛門ノ号ノ事ハ。左衛門ノ尉ニ云ル 孟津
一云。或ハ四ノ御方入ル也 一云。或ル説ニ云ル 孟津

三の星ぬかの　三の星の随行まて千九百間任転遠在昌賦
十一月中長至夜三の星の遠行人若為独宿楊梅館冷枕草
床一上病身　文集
一粒迦牟尼仏ノデレ　弄金剛佛
お菜ちぐさの心せ　一さゝひそうて　たゞ云ふ卿
北主今不越境　一さゝ　幾瑞る奇怪ぬ
一さゞれつゝへて女めぞ　或記曰滅皇女整子内親王弄女
宮のよるまておりる　若れるを祝ぬや
一さけそうそう　殺のぞや　愁殺ちぐ詞ぬ　作れるつゝへ
うわへそあそう心や　一さやうそうそう　爰ぬち
保氏の放院それ　爰ぬそうそう　参そうそう
一さなれそうして　為用や　抱そうへそうしてそうれ

一さうぐのはし　さるすべりの額　ふるめかしき物也

一なぬし中将の名をば　なつかの勝

さうぐしくら

ときさぶめる物也　在原業平の　みぐしあげの

一さうぐしくらもて　　寄れる妻の　髪ろさ　稜芳ありて　惱乱ときや

一法皇　御ぐしおろして　　法皇　御一代一度　法皇　御ぐしおろして

おりのぐら

一さうぐしくらて　　もとに立ちてや

一さ雨くれのふるぞれさ　童八汗衫　ぬれどぞれをぞぬ

一さうかうがうく　猿楽のさる

ぬぎて　袖ぐらさうるまや

引とる心や　猿楽起上　堅固太夫　秦川勝を仰て　作二十六番一

人くる　間書　禁裏　寝殿　竜をろして　舞をろす　千時太夫　翁

永字　神字をろして　名なて　申楽とつとさる

一さい人さんへや　一座のとうとう　寮試の
白い長幼をもって席をもって人の種性いろめや故こ冠者の
えらこ・学生さん来座よねみんなうとう
一さくさくもうすみつるる手さくさくさくるる心や
一さくさくれはそうくるはやくるうれねうそんて　偏八面白妻
えびなや・いねちいうすさんのおやれそうるるれ・はやくるるれ
うれうとうや
一さうそうち地のうちさ　何文とも
一さしぐず　さうぐちょも・さし
一さうそうや　舟の製来や・屋形の
一みず風よるうれへさ　みりよ
一さうぶそれ　菖蒲八面青妻

和極也
一きみこれのこのごろ〳〵ひ哥の
うちこれをこゝろくてそう
一おまえ　唐の書よりおまえ憐
そこいおまえと書心内ゟおとこをおとこうまうにひうて女にそう心
してひらべーといふう
一さうべさまうちきみぐれ
はまえと書く卿のうや呼法院也
一さうれの集雅院　義平ゟ門世ゟ常いう多帝を并集雅
院ゟや今集雅おりーますゆへよ前のまを入うや
一さーつくへ云くくくる也　一さぐれこうどのの古万葉集
ひ古万葉のう法物さぶるう。是集古万葉集て別よ四
巻こるれさうみうき云をゟうよ古万葉ノ序あてまう行云
れいせ中ゟいちやみうこゟれゟ祢代ちうまけう時のみゟくく人

一人の手紙ときおつて万葉集とるひつて読むなつてそれば
万代ついまもあるこそひそみべくらぐ略々
一ささうれ西上人唱号れ西上人也
渡城れ門のれ撰九
ささうも唱号也
一さうぐ秋好家ぐ
のひーぬときめれこそひれれらーのこことぐるーる也
一さつぐ秋好家ぐ女こを次ぐいへりさつぐ指の緑也
一さうれのれ堂ぐて薬師仏見松凡巻一源氏の建立栖霞ぐ比
すう九薬師ぐ寿命ぐいのうゆへぐ
一さいそうりうそう家勝王経金剛般若寿命経何
一さうぐ字ぐも四十賀ぐ渡経今の前多花鳥垣宝乙
八貞観十七年閏二月ぐて千七ぐて薨ぐ貞信乙延喜十

九年四十賀ありて七十賀まで齢もあれど多くは
つゝしてゐのりすくなきは心ざしのやうなり
一さゝしの外の岸は沙彌和也 善導大師僕也 指到淨土安養界
還生穢土度人天心也
一ゆめのうちうつゝをいふ
一さすがに 一星と紙こ 篠原家まで 一さもこそいふべのうへ
一さるまうさう 六時の念仏 一さるまうさう 六時の念仏
あいもやも神社のうへべ 念仏おのれ 紫のこのくれなゐ
一さくちやう 楊枝也
一三業帰命 一心不乱 うつゝ 夢のうへ 花のか

一三絃琴を弾くこと十数日にて、うつそみの撲のうへと云ふ一元のお

らぐい字のお稽古致いやうこそ十数年でおりつこそ

一そこそこれつまにするある　秋と麻吹笛とりつや

一そおりべそこそやおりけん　宮住ますこめくさおりやこや

一宰相の中将それ秋中納言と改名め　そう秋さいは老こ丟字治

のれ指そこその年れ秋と心べし　此時分ど知梅行川ふるで

年れるそ　莖六歳の秋と心べし

一さぐらわれいこそべき　今始そるそこあぐ志そそ

ひんこ　おりんぬもそや心のそそそれるや

一そこそこそも　そそるそ行ふるくそそぐちるれこや

あるべきその心や　一さくちもさくちあけて酒後や

一さぐ　倍るぐるや　一さそれ院　源氏暁戦こおそ

まして法うをもくるうしや。さるの焼滅天皇大官寺まで通せり
ひしてそうけつ
一きみこの別当　為人と云。
別当にん系大まうべし。大系うこと大まや禁中にそい為と乃
別当大臣ちすべくべし。まのをもをそうみや
一きうへ　おの為うきうとうくてそうぐわて矢通せい懐中にして
退出やそれをうき為ると云
一きぐうくうあうさいくと
そうう和
一きの地のうくる白住のうく人就
をいうくうのうる
一きうしく雑事くうる女房
一きの為くてけるも寝為と作改
れのうそうくうる
うし
一寺
一きうくうる四阿・罗へ菩出しうる就と云。きうくうる

一さてさて久しく逢ぬ事やうやうの紙ようこそ
一ざれうまは おまえ
一里の名を里の名いうさという紙我身ゝれそいうさうさ
一さればうさ ひじやう 如何事や
一さらばうさ里なれう心え 母家一先逐入吹放軒 辞半引テ
一さ庵よ 指ぬ
一さいこん さうぶこんの心
一さうやく 難役や 若菜 総角のハ濁や 若葉 澄や
一ざけ 卵酒や
一さうびやうー 筋病や
一さそか けるその心
一さうぶ 不出別
一さうもれ
一さうじやうて 清下や
一さうさ 残炎や
一さうぶ それぶや

き

一きりはめ　ふたつにてそれぞれ外際よりそりさせ
　　せ、さげまさりさるまげあるめせ

一きりさ　張弓せ　　一きりさりある　清せ

一宮人名　地名山物役よ行まても云さるまをそさりしさ
　　さりめりさる、又字さるまをしのよ、有まるうべし

一きりつぎ　源氏舎と桐壺と云せ、此舎の一せ、弘徽殿承香
　　宣耀殿なと代もて行馬道でさるれぞ、おさるれる
　　をもるせ、此舎にのよい桐壺と淑景舎、梨壺と凝花舎、
　　壺ハ飛香舎、梅壺と凝花舎、雷鳴壺と繁芳舎こいせ、
　　いづれも大内さま、物をさくさる、有物つぎと云せ、源氏の母御息

一きそうろう　うろう月心也
一きそう　警也　倍也　猿楽と
一きびし　稚　日本記　おさるる心也
一来れるおもて　面也　おもてもう
一吉祥天女　仏の春属なれ
一きぬの者ひ　衣をひろ
ろうのおおき衣ろうの類をもおよそとあるべし
一きそくきぬ　男をまもろうへるしばりをあるくそうの
たぐいをもつぐる事也
一きろけ　狂をめぐらす
一きろれ　ふそれをふろ　ふろと名付　水陸二並

一きくどの　隣家へいひそかに行やいやしき女の名也

一かしまの御寺　向南山くらま寺ともいふ

一きくきくらん　俄式官政官也　ひらかなにいふ

うたてもや　奇大内花の外ちる

一きやうあいのうくけるのもと　故事隆のこやのれ

たりくや　後葛　唐更　掻上蔦　掻爰のこと

一きさくとぐ　聖句童句　前句の数也　投壺八本立后ガ后

ガねをおろしまぜし　后句とのなり

一きくをおりて古人をおもふ　何　狭頭　更後擬　云女人の

みこ元良のれいのくらめる　四十賀し給ける　勘の名をも

しそこき

一きさくれおもふ　中務と立ぬる

なつびのうも　　一きうれんう　中宮のおの陣
し玄輝門の方も　　一きやうく　還途さうくう
心も　うふつくさあうめづる心や　おもひやるやうも用う
あるひ
一きんごうもいさうのそこ給　秀吉大臣の息廷　望官給も
一きこはなうる　精進の方へいさても
一きこれ物のくさうも　柳ハ非情うてうも心あり風
なひて気をうる　漢武帝の勇赤柳ハ一日ゑこ枝おさり
けるゆへよ　人物と名づけうちへこ眠うと云も
一きこそう　ひがうれハ雲をうへても　かれ消てうとも
うさうさ　ハ涙の心も　　一きうねのすさうる　鳥鳴松推敲
一きうる玉のぢく

あり。是ハ黄ある也　一きんまち　公家鈴附・莊書

名源　家女巫巨勢金岡ニ公忠ニ公也

一きぬひけるうけ　私ニの宮うちめ・こもこれうかうけ

の袍多くきれど。是おくぶで女の裝束とうけうるこせ也。うけ

ハの種の巻ものうけうる。そんうて書ル

一きぬぶけくきつくもうる也　一きんだうこい　袍革也

一きさ〻紀の女よ日の御ぐ　采女院ニ行幸あり。北ノ丈ノ之

時ニ行幸ニ皇宮ニ御ス天長十一年正月二日。仁明天皇幸ニ幸

雀院ニ祖母佑れ尚ニ宿ニ謁太佑ニ于相府ニ見ヱ主記

一きさ〻も心ぬぐ〻　名肥前國松浦郡鏡神ニ。太宰小弐

荻原廣純霊也。又鏡ニ心ニ神功皇后の御鏡化して石と

わらを焼山とのつら是をも焼の外と云べきやトの付て。
松浦郡鏡明社やとのくるまなて。名清水八幡と同断のこと
なし仰ぎ祝の外ニ二の義あるべきやと
一きさくの人そ。ずやも。一喜春采呂や。反音ハ呂より律
ようつるをや。喜春采ハ黄鐘調の采や。平調ともつくへ
用ゐるや。平調ハ。くらゐ律の呂よりあるやと律分
一行香のくに　花筵塗香あるべくや。反よくのごとくや
一かねもてござる　面ハ例くの方や。南面を略の方とすべきや
一云忠敦た　男級野井戸　光孝天皇法孫
一宜陽殿　日華門の北や。紫宸殿のごとくや。正庁宣政殿ごとく
有べくや。

一かのまん有の前面　花筵塗香の

家又は女房をいふのるゝ又は女の政所などゝもいひつゝ
紫式部大方源氏の宮家のそしりわの政所といふんよ埒もあんかゝ

一きやうくるりや琵琶琴や鞠のやうぐ〳〵琴よいよのそくべおろうをいくわ河海一よい
れて
一きんいごれもろ〳〵琴よいよのそくべおろうをいくわ河海一よい
撥ると二よい斤芸三よい水字琵琶四よい蓼海波よい鳳鳴調
これ是也

一まつよつうまつ松もるぐ
ぎんもいまろいまろあとやうな雅成と私也私記よ

四十を越て仕といふおるぐ〳〵相ま今まで女六ゝ

一まれめぐりまろやう唐様宗いゝ女家中花開ゝ重頃恨
一ぎおるぐ〳〵倫理次べ一まおろうて岩のうけくち
八宗ゝ浪往還も陸ろとおぐろゝ何とも行ろうとろおあ

一 花のもとに八家ありて 花のもとびと
一 きくしめまるれめり 招めり 花へ大夫をうう家の中表それも
うちうきしなうまでさそや

一 きんのふ 琴清や 何 今業天曆ニまれ花垂の名れあるも
九条右丞相のれやや 延喜れ門のれ女 勤ま内親王ハ則九条右
の室うちうまくち 花 延喜のれ門の 勤ま内親王
うち給うものくる事の傍をなも給しうるを 今のれ頃よ
六条院の女三宮ま 琴れ清一云ものうちうるし
平
筆のまるやや給ふ ちうつぎ給やや 例 花こる
まるくひ
一 きくせいたるこ 碁聖 倫前掾良利 肥前国 花津郡 大村
人やや家して名 寛童 為亭子院 喪 法師 亭ま法皇 ふこ

志のあれどもそのうち大和物語のものを作り墓のことも
ようして墓聖といひて延喜十三年六月四日墓聖奉献作墓式
獻之
と尼ようとうして銀も名心をこころ

一書紀
世の常や

一きこえるいづこ 黄泉也 日本記 伊弉冉尊のことつくり今也
陽神なりみそぎのときそれをあらの浪毎事のかり
比してそのれ

一きこえぬ 競やおくそふ心也

一きこえぬ石よ一歳人をなせむこれもむこの多量也

ゆ

一ゆるふ 交加と書り

一ゆげいの余師 韓奥と云也矣をいうこころ

一ゆげいの女郎　勤奥と云也　矢をいる　そこらいう洒落

吉原門口に弓矢を売すつるさうろうにて、ゆげいと云を、
女郎にいまだせる内侍の名、織姫をそれに申らつしを、昔を
今女郎と号ちう、傾城已下の女也、旅人と云ハ下前のこれを云
紫式部と今女郎づくひ、旅人づくひてある事

一ゆうべ夜　夕の月夜也、夕附夜方

一ゆさひりうや　一ゆうさり方　いまくしき也
若衆ぶりつよき相也、ゆうろうをゆうろうさともいふ也

一ゆいこん　遠云　一ゆくうり　ゆくしゆくうる、

一ゆうへ　ゆうべの心也

一ゆふつゆるひとりく　涙の名をおくりゆふを云也、ゆふへ
ゆふべとくくゆふるゆふ、袖ぬるゝてくくゆふ吹へし

一ゆうう　弓結也

一ゆるひろ　寛也　ひろきこころ也

一ゆくてのれことい　つみでよ涙のこころせのうすせ

一ゆふつけて　ゆるひて也　晩景の義也

一タまつる　もろもろのこころ　もろもろこころ尺　まつる也

一ゆさうさうこれ　もろもろこころ也

一ゆるしろ　知識ふるまひを禁ずることわり　あやまちをゆるしをこと　誰もこころなり　制禁　こころよりこころ也

一ゆうひろき心ゆるしうる也　寛由引也

一ゆるし結　ゆるせ　古のをひて　なれ来をこころ也　ゆる心あるこころ

一弓ゆみのうち　弓結也　胎内　懐妊　弓結也　これを太人たいよりこれびてこころれうる也　ゆる　絞る義のこころ　ゆるし勝負よ

いろやづみやも　一ゆふつけて　復鈴掌國忌
部祖天日鷲神一造木綿者是也
一ゆふだすき　木綿を襷にするを云也旧覚女記に云以天香
久山之天日羅襷為手繦　古語拾遺に以羅蓋為手繦
といへり　一ゆふがほ　白瓠
ようし山ゆふやまとも称ふよもそれとや　おもふに古歌の山ならむ
ともの寺の歌や
一ゆふこもり　雪籠
一ゆふさりつかた　劉晨阮肇　有詳や天台山へ菜
をつみよりて桃を取て食し一里ばかり行て夕仙女に逢て
妻夫婦となりて旧里へ帰れば七世孫に当ると云ふ劉晨阮
肇二人也
一ゆふみつき　水仙花也

常に行幸をぞ忘るゝや

一ゆめとこそおもふ うゝつゝの憂
れ心ぞ

一ゆざけさ ひろくいふ名こそ
心や

一ゆすらつさうゞけの名 ゆすらつ
さい髪(ビン)ざいのまやうげの名いとゆふうごかすの地也そゝれ
やうちゝゝとおもふ

一ゆうまそゝろて ゆうまそゝろとい(ヤ)紙
さうゝゝゝるゝや

一ゆーしあんする 由縁(ユエアンスル)ゆえいゆう
名下
きれもやおんとい押(ま)こゝや琴のるひ(てうひ)仕や 弄 月ろゝ

一ゆうふさあけれと ゆうふい消(テウシ)のさゝら心のゝ地まて各よりおりま
ふる ゝゝゝれそゝろゝ地やゝれい夕方をめしてゝゝへまを給(クレタ)
うんとや

一ゆうまやうゞんうつる 天與(ヤスタメ)
善(よし)人(ニン)吾不信(スーセユンシャウスヲカヅカヂハシンテクヰ)右將軍墓草初秋紀在昌 是い右將軍保(ヤス)忠(タメ)ゝ

ゝを作れる物也 叶半見 ゆを代といふ かゝる韻字なり 秋とあるを
今あるまゝにて あるべし 三 端もこれるゝ心優 ユウ と 月の
比もれば 秋の字なくていまゝの節 キ ツ お遣 イ もて なよ 時節の余気 ケシキ アマル
さびしくもうら枯多し 又大事 多 きも唐名 キン ゴ ニャウクン 今吾将軍と又
ばかりのまゝ 保 タス 忠と例 ためしなき 仰 ニ 給也
一ゆるされぬ 紙 ゆるけきい 寛 ウチ の心也 さるべき 舞 ブ 者すれ
ばなり也 何 ナニ 寛 ユタケキ 平ラ 古
一ゆみべのもよほし 催 モヨホシ 上古 有るげなり
名 フセ 指 サケモノ 物ごとも此 布施指物ごともうけて 是 等 ラ 迄 マデ 有
きまでつゞきける也 俗 ゾク ともうけるとは 例 タメ しつゝして 久 ヒサ
もといふけり面白し云々
一夕れ雨 タヽリ 新秀 貧名利夕陽 アラタ ニ ヒン ミヤウリ ニ ユフベ ヒ
死 シ 二 ニ 如 ゴト 縁 エン 云 イフ 々 ヒ 人 ビト 〻

一ゆきみつる汀のおぎの　小荷ゐ摘込もろもろ拍めづ（ノミヤ）

おもしろまろめゆくさへもろさやも

一ゆすゐの名ゐ　接待（くまの）せうこあゝひのみなゐちあゝさやも

一ゆきわこもて　動（どう）や　雪の夜も

め

一めさ風（ふう）さ　行冷眼（ぎょうれいがん）とけてすゝまづくろ心もろ．それむ

心もろべし　一め紙そゝめ　側目（めじめ）いそんあて

てころ神せ　一めづこもろ　妙音（めうおん）　拝仙寮（ジングウクウダイミウラ）

ひ河い神功皇后松浦もて．鮎の釣（ツリ）ようれをけさゆんべて

めづさら祢けこもろ也．松浦も始いめづこや

一めこもろの紙　馬道（めうち）がひろさこもろひろめべし

一めうぐ〳〵そんぼうや　一めをつぶつて〳〵文字助や

一めまぐるしうれうき日のさ瞳ら心地や・まぐれるう心や

一めぐる子　瞬めまぐるすうや　一めもあやふうつ〳〵さ心や

一かいもうれ代四代　弘安源氏論家うも貞信公のおまけと

いつか親行抗同ぐ胴壷を延喜の准ぢび陽成光孝宇多醍醐

ふべきれ・天徳元慶四子誕生たれば延喜もうで既四代

也・王時左大臣や・忠平擬するふれを

一めぐ〳〵坊主て　課や車れ立ておるさ時ふまるくら

ふふる

一妙法ものくう　江刕ふる・井筒屋山・妙法も村ふる

一のうさぶうて　世俗ふめりけるぐふごう〳〵

一めぐり　日めくや

一竹門　そりくう　感ずる心や

一めでたく　めでたしとも　一めでたさも　西宮故二院
文難き中にも御親勅行給ひ給ふ時云々今桑親王家又ある云々
経或ハ宣明親王嫁娶の時・石経半残二方を録よの由云々
記せるとも・白文のみにもあらず・めでたしと知る院猶院
のたまはせて・石経を見るべきやうにもあらず厩舎人
もぐれ・五位六位のさくいふもさくのごとく
一めでたき瞬間をも　一めでたきためしなれば
月見や　めでたきためしなれ

み

一みやつこもてなしも　礼祀官家の二字をみつゝ拍手
をするかと・疑ふもさくのごとし

一みつがひ（三栄）れ為也　一れおいくてもゆくさき

くれどは（二番）彼延喜の代の宣旨也七歳（ミヨ）（ブタ）（ブツ）（キリツ）

忌令まある也延長七年（ニテ）宣旨（ヲ）忌（ヲ）ととくるうい延喜（セン）

（斉）

ととくて不當（ニ）ととも　一家ととの（キン）

ふ家ゆきむすふい洞（十三夕）ととふ（コ半）（多）（三）萩い名家のもや

一家のうちまめさんするい　寛平（ノ）遺誡（ユイカイニ）（タイ）（ソ）

箱（ニ）中一見（ヲ）ひ（ヲ）ととて何海（コ）い家の（ホンゴ）（イ）文（ヲ）遺すといふ

名鳥（ヲ）の字（ハ）めぐすてるまぐさ時のもや紙い折（ヲ）ととて

みるまぐさ也（ヲ）ととる　一みやとて　ゑやもんあさよもや

文衣のもやれ（ニコ）紙うとゆひていぐれをととそゑやもんあさ也

矢（ヲ）のれや　すと（ヲ）ととまいうのゆゆへなる

一みつ〳〵ゆひ　びんつゝも　一みづ〳〵（三ツシ）れ剃み

一みゝ〳〵ゝゝうちよ　うぐゐすゝ神や　ひんの髪を（九三）（三）取ゝゝゝも

一みさ月（三廿来）探　ゝ〳〵ぶかき心や　きよう〳〵めをさや

一みゝてる〳〵おげるさ　宮住（久ン井）のあゝれるをいくち

一みゝくゝ　ひゝゝうも　一みゝ〳〵げぶれ（三ケケノコヲ）れ更被れ眠ず

織絶（タチヌノヨロ）ぶをいくち　一みゝ〳〵ろさ　方ともておつよ

一みいれの（タクヲ）ぼ〳〵る　小家（ヒ）いれく

一みさ元の私　れおの私明（三ツヌン）やゐい

まつをさや　一みゝけさう〳〵ごるやおゝん

吉野（ヨシノ・キブン）金峯山よへ　いよ日よ精進（ヨシノ）や　七巻（ホンノ）の當来（タウライ）の尊師（三ノ）弥勒（ミロク）や

まてゆうさ随や

一みゝさ　水屋（三ツクヤ）や　一みつ〳〵ぶゝて　幸ゝゝぬれぞ

一みちさ　水ぐも　一みつ　ともうして　手うちぬれて

勝(まさ)ぐまち背(せな)くぐまりて　三の膝(ひざ)ごぐわんでう中よ頭(かしら)ぐうなだれて

三の指をくうくうがくくや　一みやうぐのう　名香(みやうがう)　佛よ

ふ香(かう)や　一みや　人(ひと)よゆきて　安(やす)ハ禁中(きんちう)ぢ

人(ひと)よくくんとも　一みぞそやう　打(うち)ぬ待(まち)のこだ

や　思(おも)ひそやうふるへまれをつくるまをいくう

一みても文(ふみ)よ　あひそて　安(やす)ぐうがくく　只愛(ただあい)の中ぬやうか

れバ愛(あい)よまぐされて消(き)うをまぐーそや

一みつの女(むすめ)して今一くさ　琴詩酒(きんしいう)の三やや　今一くさ酒(さけ)ちべし

一みくうーまいちもんそて　思(おも)ひ抱(だ)ぬかくーをあげおろそまをくくうーまいちぐやや　一みそくん人よ　涙(なみだ)の流(なが)ぬ袖(そで)を　抱(だ)ぬ

ぬくくんよぬるをくや　一みうちぬれ人(ひと)ぢ　今乗(のり)れもと

ぐうそれびんよあう人いぶかのころあの西表を多くて祖假するを
うちこれ人ぐこや 再 こうちうこといこうあのうをいをや 於
鳥 以礼不審
一みそけ 四衣幣や 衣荷
一みそぐうちいのうくて 簡をうこうや
一みちのうるぐく 煙紙や まあこれうこや
一れんくう 毎年 定れうるや
一みーいるくあういるー みーいるくこい桐帝 あうこい源のるや
一れをういうちれまもぐく 古墳何也人不識姓兼名化作路傍土
年く春草生 禾天
月家よをそうこうる
一みうぼぐそもぐー 松のるや
一みぐのれめをうく みめこうむ
べし日本記に祀の字をうちうこうぼまの何よをいぬれめをうこうべし

一文ようめしあるこは 就文也 一みやこうくんこと也 仲国云 懐刕ものひそうのかうそ 和名抄云 ものて 云ふ 罵を ぬそ ここにた掌府へうつされのこう 栄花物語 よこしうる

一みちうひそて そのりちびうる

一みそひのあまうこり 御衣櫃 荷也

一文ぐしを 文台は 蛭児 とうそてのかやめうりもそれうを也

一みつのた 三種の門を 井を 厠を 是三処也 再ふ合

一みこそくもめれか 是かこは禁中のかこと云心也

一右ぐんのこそこをんうれてづく 天曲再ふ合 右方例須汎机 香下机 汎綵浮文織地敷云ふ 私今案右方絵は汎の高き入うる 絵足はあしくきれうる也こしうる何まそつれうこは云

ず。そんなうハ河(ガ)のあさ瀬を云ふ机をつくれる。打渡(ウチワタ)ハ下机(シモツケ)なり
地蔵の名地のさまよ松(マツ)や。そゆひのさま民。花(ハナ)をうくさま
かくさま河海(カハミ)ハ多くの糸にてむすびうせもろくれうばつ
ゐる。そゆひのくさいおさびむすびや
一民ア不物(コレユキ)行 兼明親王二男
一みーはうの袖(ソデ)よりおりて 民ア不物行 兼明親王二男
一みーはうの袖よりおりて 民ア不物行 兼明親王二男
一みーはうの袖よりおりて 民ア不物行 兼明親王二男
一みーはうの袖

峯雪撥簾看 采天

一ぬ門のいろさむきめも 康み

内親王 延喜 皇女 村上帝の時 弘徽殿 ほおりけるよ九条右丞相 ひ

てまいりたまひける例 多し 一みるらく花さそふ名うくひす

哥同 人節ごとの例のうた 一部 人節を文仕うまつ

るうた吾おもふ妹見ようえしうら

一みさごのうたやう 六位の人の文ようをまつや

一みづ鳥のうくるまでくる 名うきるさ心や

一ぬれあまいろよ 足をさすろうや

一みづむもや 路芸 人を饗応するよ 着ぐるとび水澤 云ゆ

子飯など用さあるよくて也 澤 云ハ澤海よ馬子水人

よい宿酒など用さそて ずりてをしくするよ 噂うと 礼法

おほ夫、宮こにて別ゆくとし　一みせちどりうたまくら

名をすて勝負するやなどくつゐる紙ぐるみやも

一みつぐりに逢ふちどもの夢ようづくひのべ〳〵さうのれうそ

ひぐるま　まアヨ記　夢前親主ゑつ着地摺布衣及袴　或ハ茶本蘭小

穂子餌袋　今案、是ハ王卿の夢前の製ならや、布ゐるとゝめの楔

の文をゝさう、袴も同、或ハ茶本蘭地のゝゝめのさゝをゝさう

ゐそ、ゐる、穂子ハ下よりぞねうゝめのすや、忘袋をハくべし

寒い寒纓の冠をゝさうべし、仁和寺ノ行幸、行平中納言、大夢前の

ゐ衣よ、鶴を文よめひゐうを、王卿の夢前のるや

一みつぐりのあゐう、延也昌泰ノ行幸例也、法皇ハ必ず後の絶ゐう、

一のゝゝい、主上ハ同さるまゐる、何延也四年十月九日大井行幸

一のこさい 主上ご同さまさに 延也四年十月九日大井行幸
正服赤色袍黄櫨染れ袍文行風時儀ニ依テ青色袍着すの時ハ
主上赤色れ袍を云をしの給 余略之
まれらら
一みあるう 只今也
一みしまるとうち ニ山ホハ天
みのかすとそく云也
一みくらの風のあやまし 丸ごくら
ゆく云同ま也
一みくさあり中し何 三種ハ皇方
ニジウハイクハクハンケウノウノ
伯浪梅記寛教修始記云春ハ丁ま加場みべしごそれバまご心をもや
一みあれ 夜のくん
ごくごら
一みあれ ごあれハ玉依姫の別雷
弁をうる給しまる云ゆ さそれ生ごも書則くちをあるう
多くる取よれ形ち云ま弁館ハごすれなやれるぞさごうと
云ゆまあるごのくう日本紀云弁聖生其中者或れ儀条のおの一日
それ儀日ごやれ生ゆハ弁館まあるとさ云う条時れ統ゆあるし

一みちのほどそうそうわさ奉りけるそうそう　延々（エンエン）のうへのかよ

算（サン）よ物（もの）でもうれうまいや　一みづのうへのおさ院のう

ひれ厨（ミツシ）よりおほせ南一人預膳（カシワデ）タキ子

孰（いづ）れ呼　六条院そのまやれ厨子（ミツシ）一男（ヲ）れ鵜飼（ウカヒ）のおさ子心哀

まあう物や　一劫（コウ）れ厨子（ミツシ）よりおい生（ヒ）よれ脳（ノウ）をつくさうあやそれ

よようをれうう鵜飼（ウカヒ）のうべし

一みづれうおうやくうう紙　朝覲行幸（テウキンノギヤウカウ）子供帛（ニギ）給をも

そて上皇を祈しおうのうく　一みづう（名）れ心うそうれて記（カイ）三昇

唯一心（ヰツシン）くれ無別法（ムベツポウ）のうそうればうそうもあうそうもやそうれてあうべ

そうあうそうやそう　一れ張（チヤウ）れ本法　張（チヤウ）子付（フ）れ

の脳（ノウ）よそうや　一文の信位　中（チウ）ぐのまうぐ人

の服よろ

一京の行伝　中宮のちまうぐ

ふ勢也　院の後ろをも中宮をもうけて京仕人（ミヤヅカヘビト）多し

一みな（哥）ぜんもちも　京の男をもげんとの給ふ　後ろ（シリ）も

名もされぐらざるをさしたるけしごいひろ心也

一みづぐも（哥）ぬ名染ハ　水（ミヅ）より　名（ナ）ばそめんる也　をもうそうめとハ

京の心ハうけろるめる也心也　萩（ハギ）の下こそ〳〵さゝるれらは　京の

ふ成萩をたゞへてのち　萩染山若狭国名高也　是ハ只萩山をいふ也

一此馬罕也　左右（ソウ）れむまづき六条（ロクデウ）府（フ）の官人　六条府ハ　左右

を諸府　左ハ諸府　右ハ兵衛府也　是を左右馬づき六条

府とハいふ也　此六人（ロクニン）ゆゑ〳〵此門（カド）より六条院へ参る此馬也（センケイ）術

何海若馬ニ乗略て

一みやび（フウリウ）ハ流（ナガレ）をいふ

一みこうよ施（セ）へ〳〵ハ琴（キン）もぐそをも奇進（キシン）也

一 斉 みやまおろねぐ〳〵 紫ノ上ノ後深山木ノ心ヲ人ノ添ヒテ
ふ 女三ノ宮ヲ云 ソヒ給ヒシヲ 源氏ヲ云 ソヒテ 河原鳥 菊 或ハ鳥ノ異名也 鳥
し 象ノ一名也

一 みくさ 紙 六条院ノ造

の四のうちいつれ 此ノ名有ト雖モ禁中ヲモ云ヘル哥ニ
一 若下 それそれよいつれともわかぬ 祓ヘ 形ヲ紙ニ
みふ 平 同云 祓 祓ヘ ヲ云ヘルハいつれも
民ヲ也 子ヲ百ヲ云ハ民ヲヲ云ヘルニ
祓ヘ ともいふ也 云々

一 みちのとて 如ノ 生前死後

心ヲ云ヘルヨシ 此世ヲ人ヲ云ヘル心也

一 みもそもろこし呼 おそろ〳〵 ろ ろ ろ ろ ろ ろ

一 みこころあく〳〵 いく 迄ヲ云ヘル心也

一みぐるくびやうそろひふるそろひ心ぐるひやうし（カツ）
ケ
乱のうめべ
一みくまぐにあそろしめ　白柔夫
江刕（カウシウ）ら云ふ人を遣（サセン）をそろしてあるは（ユウジョ）狂女のそろしが見（ミヤコヒト）ハ都人なるが
ど商人（アキビト）の妻（メ）と咄（コ）て家（ヤ）をうる琴（ジヤウズ）をよるよろ（ヒク）人也（ナリ）夫（ソ）をうて
方遣の耳（ミ）をあそろしめそろらと云心成（コヨヒ）今夜風（キノハヤミカ）君託（ヲクキヤウセン）宣如聽仙樂
耳（ミ）皆明（シヤクキヤウアキラカナリ）
一みらをそろしはそろげて　若衆（カエウ）の方ハ日本の方とのくろ蜜（ミツ）を
そろしはそろげてそろハ蜜ハ蜜の蠟（ルイ）ある（ハテ）ハ蜂の為（タメ）とのそろ心也（ナリ）それを
かろくそろする也
一みよふぐろろ（ミワケ）　夕雲（ユフクモ）ハそろて
かろふぐろろげくる也
一みてい　見分（ミワケ）也
一みてと也（ミツケヨ）ものをとるかもの水を一荷（ニカ）ハ源氏（ゲンジ）物語（モノカタリ）千歳（センザイ）緑（ミドリ）

二条の后の宮（ミヤスドコロ）におはしまし時、これは男やうにおはしまし、ものなどもの
一みどころ（ミノリ）あらう　季（キ）の御読経（ミドキョウ）として、四季（キ）ごとに仁王経（ニンワキョウ）を中宮（チュウグウ）にてせさせ
たまふ。
一幻（マボロシ）のごとくなれば、紙（カミ）一重（ヒトエ）、女房（ニョウボウ）の装束（シャウゾク）の
ちらちらと三（ミ）つ四（ヨ）つ見（ミ）ゆるに、私（ワタクシ）の志（ココロザシ）ばかり法華経（ホケキョウ）の
一巻（カン）ばかり日蔭（ヒカゲ）のごとくなるを、糸（イト）を結（ユヒ）て持（モ）たり。昔（ムカシ）、明（アカ）かり
聖（ヒジリ）の経（キョウ）日月（ジツゲツ）の光（ヒカリ）もかくれ侍（はべ）るぞ、をもひ出（イデ）られ侍（はべ）る。
一三（ミ）つ四（ヨ）つ、ひめ君（ギミ）たちの、久（ひさ）しう泣（ナ）き呼（よ）び給（たま）ふ。三年
ぞ、ここのつばかりなる時（とき）、泣（ナ）き呼（よ）び給（たま）ふ。おのれ遊（あそ）ばん　愚（おろか）なる
ことの、又（また）、昔（むかし）の宮仕（みやづか）へ付（つ）きて、泣（ナ）き呼（よ）び給（たま）ふ。おのれ遊（あそ）ばん　愚（おろか）なる
ことの、又（また）、昔（むかし）の宮仕（みやづか）へ思（おも）ひつづけられて、天（あま）の下（した）の人（ひと）の心（こころ）をつくしのみまでのみを、
筆（ふで）のあとにおのづからやうもまめやかなりさま所（ところ）もこころをつくる
ものの、ものごとにあさましきまでやうやうなれば

蓋の年数官位もさだまさる礼人の呼ぶごとべし

一みくるまあまた　中ごろもさがさいくゆさる礼ど
べきさまも　一みやうさる礼ど　行香札四角ニ
結金線札ともめる礼ど紙さしてさごろまや

一みへごさねの　うちおもてゆへうをいろ

一みえもうぶ　行くへ心をうるわるべし

一みそさまもあさる礼　文のごとくいろをさごろあり法度なれば遠く
心ゆるさまも　一三ごとうで　三條四條も

一れ車のりく　やうりま　平式の婚姻の礼まや

一三さまさね　女の装束ハ表着ハ唐衣ハ細長ハ貴女ハ多く袖礼
ねニおよ元さゆる也三さごさねの唐衣ハ中倍あるをいふまや

ユコシヒキ
腰ハ小腰ノ腰也。或白或地摺或打濃ホトヘ色黒也
哥あのすや
一みゝ一人の　さぞ袖ハ人恋也。悔恨ブコツ人恋テハクヤシク
忘ワスレ貝ともさゝ。恋の心ハ人恋どころよこゝめく
哥
一みそぎ河せゞよいぐさん　さぞ袖をとゞめて。引ぬる身袖あれバ
いぐご。浅瀬をうしろその哥ありべし
一此車ハどこも例ありて　親王車ハ袖ニ委ハ末門の時ハ色車ハ
てるべし。今ハ細代アジロ
をすだれ袖をも
あいうらぶれの心
有コヽロ私ヤニ晴すり名
ふ袖ぐひをもん
哥
一文まの〳〵　人家のこいうらぶ心
うらぶ哀
一みちうそいとまちあくめすべる
まるゝ
一みゝ一ぬ　此簡ミツシ事ヨロシヨノモツテハウ今袖を濡すり
哥
一みをあげ〳〵　引ぬきヲ私ハコヽロスヘ
一みやこ鳥うぐひす人ふ鳴うり人

ちゝ也　　一みあり　ハンを飯也　俗

ちゝ也　法花の祭に飯を上ると云に同じ　一みあり　水漬也

一ふとめ　ふれば　ふ爛　ちゝ也　　一みちゝ也　ホウチヨ

一ちゝ也　文政ふちゝ人也　ふめ死ふ源氏の乱

め死也　然ハ皇ふるべき紙　禁中へ皇ふめ　ふそ　ふ使ふつゝ

すゝ心うべし　　一ほれぐち　泣ふを過也

一しげ心ふさ　ちげうる心ふさ

一十二ふて元服　人生十二を一周ふゝ　ふま冠礼する　和漢古

例ふり　　一しげいさ　相撲のふ　ふ遊　海景

舍也舍ハ敎の名也

一つくひ 何(イヅレ)も新理(シンリ)性仙(シンセン)

一しんじて 信(シン)じても

ミ云也

一しんでん 寢殿(シンデン)也

一平 山哥抔(ナド)よろづ・うめの花(ハナ)をよすれぬと性(アヂカ)の哥よまる

山村ふところつくされうぐひすもうめ・そよもる性(サイ)秋院(サイヰン)とも

一しのめ 夜(ヨ)あけ方(カタ)也

一ろさうすれ 夜の殿(トノ)也

一しうねさん人 人のいふ事をきゝめをもうねさゝる也

一しうねさ 同(ドウ)

一ぐち 實(ジツ)也

一ぐく 廣(ヒロ)・數(カズ)也 數をよむ

一れん抔 愚人(グジンモノ)どもの心也

一或ふみの文の躰(テイ)ある抔(ナド)なり

一ぐね 同(ドウ)也

一ーびらぶね　まくらをそろへよこたへて
褶(ヒラ)うちもや　一ーうへのそろ　染苑(レン)をのそろへ
うすもすそ　裳(モ)やそろへを　面(オモ)ハ薄芳(ススハウ)　袁(ヲ)ハ萌黄(モエギ)や
一ーそろへの衣うつ　八月九月　四位(シヰ)五位(ゴヰ)の　装束(シヤウソク)や　声万声(セイバン)無止時(ナシトキ)　白紙(シラカミ)ハ
衣のかうや　一ーろさわりをうすをうすゑハ
染や　空さわやのそろへ　うすをのうつさをそろへや
一ーのぶね　彩色(キシキ)生(オ)ろ恵(エ)や　一トけい一ー　下部(シモベ)迎(ケイシ)や　愛(エ)ろ
つまろうさいた大尽(ダイジン)遊(アソ)や　一ーろうまれ　ひろくこめれろを
一ーぶねこめろ　ろ日ろれろ心や　幸(サキ)ろを抱(イ)ろれろをや
一ーぶねおこ　喉痛(ヒキツケ)や　いろさのろや
一ーくろうろ　ろろーを切(キリ)て　ろろうてて心やそこ

いう時こそ

一一ゐて　飢(ウエ)ごろも

一一ぞそそて　そそぞそそて

一一ぐ　試(ココロミ)も・賀(ガ)もなくも

一秋風(シウフウ)の　盛(サカリ)過(スギ)ぬれや

一四位(シヰ)已下(ゲ)の　加階(カカイ)や

四位已下(ゲ)のこと・宮をすむる・賀(ガ)の時・又(マタ)

行幸(ギヤウカウ)などの時の例(レイ)なり

一一これそて　源氏(ゲンジ)のそそもさ

一一そいうもぐりて　歌(ウタ)今案

のおもしろきのかもぐいふや

そこに語(カタラ)ひ・語(カタラ)ひ夜のふけて・雪(ユキ)おもしろくて・語(カタラ)ひ給(タマ)ひ

一一ゐそねの条(ジヤウ)・このこと後(ノチ)のこと・ゐれ(コレ)・後(ノチ)の日・勅使(チヨクシ)

云々(ウンヌン)・源(ゲン)・楽(ガク)・琴(キン)・馬(ムマ)・笛(フエ)・歌(ウタ)・戎(ジユウ)・和(ワ)・歌(ウタ)と申(マウ)す・杏(アンズ)・紫(ムラサキ)をつ

くるも

一一らるも　女車(ヲンナグルマ)は隔(ヘダ)つ

もの(モノ)ものれ(レ)ども・これ(コレ)・逃(ノガ)れのびの心(コヽロ)にてけるも

一 これさへこそ
一 もれもれ
鴛鴦を冷霜寝室とも
一 どうどうくう
一 めれば 伯連 日本記
一 くめく 年 ても
まぐ宗振人丸 歌
一 ぬにあらけさ
一 すすぎ
ひめ 恐居 古事 赴謫 人 配流 宣旨
お遊 今 源八 恐 れ 懲 居 岡
五畳 東北 北 雪 衣異 行年 納言 筑

ふるれ。若悪於西宮大臣の太寧府を遷されしを以て
彼国くるくれし例をもてなすなり略之

一しやうごんそあけくれどころひめの御
影れ精をそ。約り法華経を令持給ふをこそ云く

一二の星外故人心　三五夜中新月色　二千里外故人心

一一をるこのひとん人のひめもうす　史記曰
臣不聴乃先設験持鹿献於二世曰馬也二世笑曰丞相誤邪謂
鹿為馬問左右々或黙或言馬以阿順趙高或言鹿者高陰
中諸言鹿者法秦始皇

一一まれのちの夢　胡蝶一巻　荘子
後夢　漢書方朔曰　昭君の心を作り給ふ
一一ふるふるしの御前　涙のもと一ふるまるせ。それを人形とりて

給へ忘れ申すまじくぞ思ふ　一十三日　雪ふりつゞく

一一つれづれとてとぐろをまきて　何事なく日を暮らす

一十三日より月まるやかに　八月十三夜面白く候へ共

一一廿三夜　山端より今少し不出　一十四日曇日より

十四日曇り　十五日阿弥陀ヶ峰　毎日不断念仏勤行三時　晦日

より二夜ぐちのちごもる　心地もよろし

一一もろもろざこつりさん　着袴のよろこび

一一ちゝ礼に　中臣祓の秘文礼　乾方より吹来る天の八重雲を吹掃ひ

一一つゝつゝみて　安楽院より法華経の初の巻也　尼二人給ふ

一四位ほうてんと　親王のふいの心ぐるひや

元服の後　四位少将に叙し　源氏光ハ光源氏の同例にあ

らず故よ親主のよう准して四位よ叙しられんとぞうらうれる
孔雀明王ありよし也

一四韻　四韻ら共八句の詩也

一文託　百文奏　馬遷作

一或ひと一勅八首の或ひと
も叙もうでいるら共ら共ら共

一こうさ一さいごうごうなど 何 白綱(キヌノカタ)也 弁(ベン)ずる 袴(ハカマ)の綱也とあり。
そうでさうれば 綱也 云々(コレガン)略 こうし也 腰(コシ)元(モト)絹也 腰(コシ)こと
こともも物也 呼(ヨビ)名(ナ)一定(イチジョウ)こうめのすこや 一郎(イチロウ)合点
一こうこう 実法(ジツホウ)也
一こうこう 言法(ゴンポウ)也
一こうこうこうこう そうこうこうこうこうこうこうこう
こうやうまくすぐ文などこうや
一十三日こい河(カハ)原(ラ)にて解(ケ)落(ラク)するや
一こうこうこう 何(イカ)にこうごめんこうこうして来(キ)こうめこうもん
一こうこう 何(イカ)尚(ナホ)
一こうこう 弁(ベン)こうこうこれめ 鵜月(ウヅキ)次(ジ)
こうごうこうこうこうこうこうこうこうこうこうこう

分をもげんや。なと聞と侍るそのひめを

一しんてんけるものぞ。御のこゝろひまて。永承七年十二月十七日。陽成院れ崩寝殿西放出より二間立蝶鉏倚まで。今東縁とれかへ二条院まてをこるゝゝゝしんしるをゝ

一四十年。四十かへれやびるゝのす。故のをまた略のゝ事のゝまゝ

一しんてんのひゝでかて。畢西のゝいのひゝで西は。鞘のゝゝ。

桐壺いゝるゝよわるをゝ人。今ハれ西ゝれおゝやゝゝ寝殿南れゝゝ書ゝゝ南のまゝるをゝや一一ほれゝゝ投すゝをゝかて。

資雅ゝ。ゝの投をゝゝまゝてけゝゝさしゝるゝ。ゝハ公の投

とゝるゝゝおゝゝゝや暗。一一ゝゝれゝゝ西とゝゝやゝさ

して東檜ゝ投ゝゝすゝゝるゝ。ゝ人もて。ゝゝ人

のまひつるそうもろこしの人。毎(ツネ)に何海(イカノウミ)よ人(ヒト)も有(アリ)とみるに不用(モチヰ)ず人(ヒト)も稀(マレ)に舞(マヒ)来(キ)ては来(キ)ぬ也(ナリ)。ひの末(スエ)の世(ヨ)の人(ヒト)なれも舞(マヒ)ぬる。ふる例(タメシ)云(イヘ)る清涼殿(セイリヤウデン)の御(ミ)障子(シヤウジ)に遠(トホ)き浦(ウラ)々(ウラ)の図(ヅ)を書(カ)けるを見(ミ)て唐土(モロコシ)の人(ヒト)の舟(フネ)の着(ツク)所(トコロ)を知(シ)れりと云(イヘ)る例(タメシ)にて思(オモ)ふに昔(ムカシ)は唐土(モロコシ)の人(ヒト)も来(キ)つらんと思(オモ)ふ。

又(マタ)ある時(トキ)に萩(ハギ)の枝(エダ)を折(ヲリ)てかざしたるを見(ミ)て

海(ウミ)ならず萩(ハギ)の枝(エダ)にも寄(ヨ)する哉(カナ)

と詠(エイ)じたるも此(コノ)心(ココロ)なるべし。

又(マタ)琴(コト)の音(ネ)を聞(キ)て来(キ)たる人(ヒト)を

琴(コト)の音(ネ)に引(ヒ)かれて来(キ)ぬる人(ヒト)なれば

と詠(エイ)じたるも此(コノ)心(ココロ)なるべし。

又(マタ)ある時(トキ)に

一(ヒト)こゑの雁(カリ)の涙(ナミダ)ぞ落(オチ)そふる

と詠(エイ)じたるも

一(ヒト)こゑの雁(カリ)の涙(ナミダ)ぞ落(オチ)そふる

ひろき心(コヽロ)よあるべし

白氏天自(ミヅカラ)詩(シ)云(イヘ)る。

年十八弾箜篌(クゴ)

とあり。

もしたのごそうしてうけがう
願每把酒憶勿頑愚似汝爺 永天命十八にして始て男子をまうけて
けて名生建と号して、そのよむにのぞんで作る詩をのこす。漢四十八
首を生ずるなり。
一一ろくりの中のそへ 和琴并二の弦も秘曲もわれに落葉よ
一七そうの法服 海岬 須跡
呪孔雀唱散花 堂達 ひとり僧俊者也
一一なぐさめくりかえしくりかえして 垂衣の下よりそのまみえざる
ものをみる。西京物云。ふるき者垂衣の下より製造後ふるきをみる
一一で丸山 十王経 元天山川集鬼神
一一しゃくちゃう 帰洛中三夜錫杖和漢よもの歌九首をとりあつめ
一一のみうたも 阿弥陀仏

白氏文集十四。

知識白衣女三十余人是君詩末二句云
生蓮魚 勧人供養如是等
一一可勉
一不軽菩薩 法華経 不軽品我深敬汝等不敢軽慢
者何須修行菩薩道 漸得成仏 不軽菩薩
乃至四字の偈を唱て四衆に礼拝しもの
云々
一一ほめられてもの
中略
物に出のよい幸が袖をもらうとなる
一一れてろや そられてろハ級処 日記是ハ分別
一一のゆへ うそ無へといひ
へられうとそうする
とハまるそあをいで姫ようとそ

一 ふるさとぐち あやまち 一 よくそん（ダイセヴクン） 太政官（ダイジヤウクワン） 政官也。二官
と完字（アテジ）よろさまたるやそくちびき官あり。おどくれて来る
一 ふるふ（ヒシラ） 新羅也 一 ふるさ一言 あやまち。あやまち
ふるへるところをそふや

源氏目案巻第七

ひ

一 ひろみつ 永一位（ヒタイカタ）という也。ひろすふるぐいふを日也
一 ひろて 袖をひろふるふ
一 ひろてそん 勅書（チヨクシヨ）ひろげるさをひろすふるを也
一 ひとぐり 一頓（ヒトヨリ） 長恨哥 琴歌（キンエツイ）一対ふる

一人のみどのつき　楊貴妃(ヤウキヒ)うをみて後宮(コウキウ)多(オホ)くの美人(ビジン)をこのみ給ふ

一ひさうさ雨はーう　源氏(ゲンジ)を光君(ヒカルキミ)

普賢院(フゲンヰン)うるも　そうして　安楽(アンラク)の立(タチ)ようそれさうもや

一ひろ宏(ヒロ)何(イカ)事(コト)ぞ　普賢院(フゲンヰン)普門品(フモンホン)　敦慶親王(アツヨシノミコ)の三男(サンナン)光孝宮(コウカウノミヤ)好色(カウシヨク)を改(アラタ)め

一ひろさいれのたた　三人(サンニン)の大臣(オトド)とも

烏帽子(エボシ)親(オヤ)のうや　髪(カミ)のこの文(モン)たたや　加冠(カクワン)の人(ヒト)や

一ひろのつさのれむま　百人(ヒヤクニン)一首(イツシユ)の歌(ウタ)　右京大夫(ウキヤウノダイフ)集(シフ)の内(ウチ)

馬也(マヤ)　多(オホ)くとすくてい　多(オホ)くの歌(ウタ)人(ビト)の被(ヒ)なや　歌(ウタ)ま

はさう

一ひろう源氏(ゲンジ)　そうつぐの冬(フユ)の後(ノチ)の光(ヒカル)さいをうけて書(カ)く

一ひろめくづけて何由付(イカニツケ)一ををうーうまる人もあるや

一ひうーく　れこれおるぐほぐのうをや

一相撲清　素戔嗚ハ天下の政をまつりごとつかさどる八省よ
ミやこ大納言まで素戔ごと相撲清と付やうに官物よりの三
四位などのことや　一ひさうもさ　毎事相　毎貪相
も面白や　一ひこぢご　昔ハ尾よりとる
も今のやうに髪のそゝぶ尼さいのて喝食などやうに
そゝむやうまでつくほどや　ろうそくひさいごをさくことあるを
ひそこあり　舌出　何　頬成　人のまく時口よりとり出すを
をゝ云やゝ　手先なれバ口のすゝむをゝ云や
一ひぐらきみそる　山の鳥のねでみそひさ指　裂地　引ぐく
そのそ　そろそろ秋や　一ひきあくべき初のそひさ　机帳
唯や　一ひそやごまさ　垂髪　絵のゆくさも

ありこともや　　一ひとやさもあるべきやうもせで
ありさまや　　一びんなきさま　　タヨリナキナリ
一ひだりさのつまや　　ヒツキ　柱などもとゝろ柱や
一人とある　添寝　宮仕などすることやうで
一ひらりあるさま　ふとそれよと光あるさまにハ拍子あるや
一ひのやうにと　今もひろうじとゝろ〳〵番の者の声や
一ひしく　　ヒシク　犇や　　一人のゐ　　タヽコク　伏ゐや
一ひだ拍子にて　　ヒカモノ　僻者なり　　一ひろくもるさま　ゆさるあるさまや
一ひやうしのやうの文　紫の文　　キ　後ハ或ハ文ともさまや
一一そう　一族　　ヒトリ　やひろそんや　紫のこハ若壺　皆音ハ一つの一族や
一人めもるさま　一ノ文字ハ体　　ヤスメ　ともや　人めもるさまや

一ひさびさ　夷おそびこそや　一ひとつこそあるこれ　てびこの也　暗こそやうや　一人のこそびまでやばーやれろ

人のみびまでの祖いくこへいつこつそて　いくこちひこそこのいはこそこ　善悪ハ善悪ハ君のまればなおのくのこけうをこへもらをのそこくこへのこそこゆくるれ心や

一ひやうてうこそこそて　平調ハ箏柱をこげてこれこや　呼このそのこそへの一越調こそこそこそ箏こそ一越調をこそ

ろよこう一越調こそこそ二やうあるこう一越調こそ　こそこそをよもれ方へこそてこそや　これを一越調こそ又係箏

呂候也利ハ指こそ調の事や　平調の曲よあこず　平調よこそへて

調ふこそ絃をへて後呂ふこそをこそてこそくをちをひ

れうあるに、こゆるぎ・磯洞といふ・そこに平調にて吾妻（クンギイン）
洞院大納言（トウインニヤウナゴンドウスケ）
一ひやうし　そうしやうむや（ヒヤウシ）　拍子（ヒヤウシ）
一人ひちりき（ヒトタケ）　人給（イダシビ）　車（クルマ）　ゐ（ヰ）　ゐ（ヰ）　ゐ（ヰ）
ゐ（ヰ）　人給（イダシビ）　笙（シヤウ）　笛（フエ）　ゐ（ヰ）　ゐ（ヰ）　ゐ（ヰ）
一人ひちりきおまつ　夕顔（ユフカホ）のかよい路（ロ）の笛（フエ）
不二名字一
一ひちりき　さくま
ひちりきちよむ　ゑ（ヱ）　ひたゝけや。
一ひちりきや　火焼屋（ヒタキヤ）　秋供（グ）
一ひちりき　河音（トモニモテノヒタケ）　ゐ（ヰ）　ゐ（ヰ）　ゐ（ヰ）
一ひちりき　笛（フエ）　ゐ（ヰ）　ゐ（ヰ）　ゐ（ヰ）
一ひちりき　長和二年三月雷鳴（イカツチナリ）

氷降大如梅實（ヒョウフルオホヒサムメノミ）あられふりまどふ
一人のみだりに美をもてんじて傳說（フエツ）が古美（コビ）を勝（エタ）ん事を貴（タフト）ぶ
るがごとし（ズイサウ）隨喜（ズイキ）の餘（アマ）りにや依（よ）てなり
一びんそれぞれのうしろにありて（ビンソレゾレノウシロニアリテ）
髣髴（ホウフツ）として（ホウフツトシテ）あるく法師（ホフシ）や尚侍（ナウシ）の官女（クワンニョ）のごとし
人のうるさきを（ヒトノウルサキヲ）忖（ソン）らずして世中（よのなか）をづまりあり
漢高祖（カンカウソ）威（イ）夫人（フジン）を
竈（カマド）をしりへよりて（カマドヲシリヘヨリテ）趙王（テウワウ）如意（ニョイ）をたゝきころさんとせし時（トキ）呂后（リョコウ）
とゞめて（トヾメテ）張良（チヤウリヤウ）がこゝろをとりしにより（ガコヽロヲトリシニヨリ）
四皓（シカウ）をめして（ヨヲメシテ）是（これ）をつれて（コレヲツレテ）高祖（カウソ）の前（マヘ）へ朝（テウ）
そきて羽翼（ウヨク）已（すで）にそなはりぬれば（ハヨクスデニソナハリヌレバ）惠帝（ケイテイ）をりぬれ
うれざりしるしを（ウレザリシルシヲ）
一ひらづゝ（ヒトヒラヅヽ）
并（ナラビ）に各（オノ〳〵）
一ひらづゝ（ヒトヒラヅヽ）
ひまあるれば中（ヒマアルレバナカ）中あしきを（ナカアシキヲ）
一ひらづゝ（ヒトヒラヅヽ）
むをけづるを（ムヲケヅルヲ）
一ひらづゝ（ヒトヒラヅヽ）
深（フカ）の色（イロ）を

そくそくせのみ紙根て銭うち出書てうらべそ和そそや

一ひと巻そ 唾 結句の番肝要さあそそふや

一ひごろいそくそんのおそすそうれけそく 天満哥合左方例漬ばそ
檀机藁苧下机紫綺地袋云々今番左方袋ハ紫檀の袋う
へて藁苧のまそてつわりけそくそまゐ又下づくろまべーそ袋
地ハ赤のうへの綺せ打袋ハ机をすへる地袋せそれハ蒲萄染赤
うへれ綺せ袋ハ机のそ蔵その神せ

一左ゐ代ぞひそうそそそて 哥合ハ負指ぞてあそや 天満云
哥合ハ答私若枝を例漬ますへて 右ハ負ハ若枝のそ袋ハ
ますへそ右ぞそわうまや

一ひろれこごうそへ 次生蛭児 雌
已三歳而脚不立 四度ゐ祀

一日のりそいそそれのうへ

陽成院の御母二条后也業平中将ちぐさ集
[illegible]それもこゝろ[illegible]文などもや

一ひこうろのそうしもや　一ひこうせ中文の事ども
枕草子云、三月十日あまりの程に雪いたう降りて侍
し頃、職の御曹司の[illegible]にて物語などするに雪の山
くづせなどおほせられければ御前の童ども
[illegible]中宮
[illegible]

一ひこうろこくうこうふ　此事傳記未考
一ひげの事　河[illegible]蘿蔔為平[illegible]古詩拾遺
諸社の祭もひげをかうり髭ともするや　昔の類也
一ひもまいり　一厠をかやく
一出家をば　照宣公御ゆるし

一人の名也　一ひのれうそひ　ひろれ裂裏也

一夜のをさう人名也　一たれつそいそ　ある官人

名官人に将監将曹府生をいふ也

一人よもるうんそいふ呼　笑ふ事をいふ　富言を述也

一ひうろ　日本紀　氷を水酒よ漬して用ふる氷水是なり　氷室同ひ

やうるる水也　一ひろいのらろ　ひくろ也

一ひちるるすろ　一面叫呼の声　波立なよ　心有名也

一ひろろるる　羊張　一ひうるおてこうろ　歩もをろる

ろる家の哥もに獨ごろる也

一ひちぶろのろ　桂皮名　桂のある縁あるを

一ひろろろ　引切也　一ひろんろ　縁合縛　合を織ふろ

ㇾ汚也　　一屏風四帖ようゐれまをのへる。

ようゐれるとい勅筆の経也。又哥をあそばさるゝ云伝るゝのあ
やい磨滅ゝそくちゝる屏風也。うすくらんと云うすぐ云也
一ひさかたのくもゐのきくをあるきくる指也
一人おもふ　忠臣不事二君貞女不更二夫
一一日一夜ものむこと　往生礼讃云中尊中行中根人一百廿戒
處合道　吾導
一ひとりぬれ　光君嵯峨院ゝ御
吾一路二三年後つゐる暴露しおるをや云也。天ゝ崩い暴露と
ゝや。此巻ゝ幻巻ゝら九年也。是の年幻巻ゝそゝ歳也。六歳
ゝる十四まで九年也
一火をけちゝる　法花経　仏ゝ
一秋風感新盡火滅

一ひと 氷を 一ひとり 蛉蜻の朝に生ず
てりてもろこし・を帯の喩よめり・仍て
心うてといひをしりの名ありひるをいれ
れ氷莫ぐるもうそいひの礼無うべこそ
一ひろごろも 人を為る人ぐるけちくの心をわる
一ひぐのうそ 時ついき日ろ・仍も彼岸いうさるこも
一ひこ浪 寒星・白よれる
一人のおよあちそん事れうち 及魂香のも・事史人うそ浪
漢武帝耳泉後裏彼良尚方士そして霊薬を合うめて金野
ま焚ーぐ・魚の煙の中ま史人の姿みそーる
一人いれ 秋の御出和の名事

一ひじりさうし　聖人ありさんせう物語

一ひさごれん車　底れん車　糸毛や

一ひらうげ　猟御毛車

一びやうぶ　昔絵巻

一人よろひ

一ひさごれんくみ　やなぎうちぐるま

一ひさあけ　まくらや

一ひさご　亜字の網をもつてれん体息これをタヘの礼装とす

一人よろひを　波うつ毛を白くそめてこれをのふねの飾とす

一ひつじのあゆみ　唐面羊歩　唐土羊牧重食はこのごとし

一ひつじのあゆみ　唐面羊歩　唐土羊牧重食はこのごとし

唐面へお臭くて行歩歩きようなるごとく　足を毎常

ゆめゆめ

一人のうむといふ　解義書曰

ユメユメ　ミルハ　ノフスヨ

まねこそ

一人のひとといふ

一人のみ

一人よもれをもくまれ・人もあれ

一人のみぐるを　楊枝妙法蓮華経

一人ぐせこそ　人水二石清の流

一人ぐるぐ　人数の水ぐすぬや

ユメニ　ミシハ　ノタスモ

夢見病人死必死

ヲニ

鬼ぐもあれと云句

フモヒリ　フジンサツノヨロノコロ

思李夫人去漢王情順

ヒトカタ　ススホクセニ三十リ

一方世之三人不可一人也

コホリ　ミナツキ　ニ

氷を六月暑をさくらねよ用ぐるや

ハラ

不遇傾城色白氏文集

ヒルハル　タ　ミニヲハ

一ひを拾のみぐる

スシラ

一ひらへも　すこーるれぐやめぐて立ぐる人不知句

一妙法のれぐ　女一家共祖ぐらひぐるぐ

ヲニ

一人よをくれ　人ぐら遂ぐるぐ法花経　或被悪人逼ぐるぐ

スクニ

一人の心ぐいぐん　船底迷人れ若菓ぐ迷人遮ぐる

ハナダ　アマキミ

一ひぐる女　面摸芳ぐくぐぐ　うぐ苔田尼ぐ云ぐれ用文句

モヒハイロ

モンサツ

一ひらぐーあやうぐて　妙本経・方をぐんぐも人の指のぐ

そきをあぐるきざしてくちうごを俗語(ゾクゴ)にひばくちうといふさ無礼(ブレイ)
わけくちうをちがへてきゝ一人の老尼(ラウニ)にまぢくちうと心おけ(ガテ)
一ひるまくち 陵園妾(レウエンセフ)拍嫩(ハクゴヂヨウヒメモスカセ)終旧風蕭瑟(シウキフウテナラヒノ)
陵園妾よ拍嫩終旧風蕭瑟(ヒキカヘシ)引手海棠(カイサウ)
一ひるまくち 一ひねもす ひるくらし
一ひるまくち 人ろや(ヒトヽ) 一ひるくち 飛(ヒ)や
一ひるまくち 老一や 又ひるまくち
一ひるまくち ひるまの俗語(ゾクゴ)にひるまといふ
一ひるまくち 枝破(ヒバリコ)ま 添削 一ひるまくち 飛(ヒダウ)や 添削
一ひるまくち 後成女(ノチノセフニ)院ひるまの茶碗(チヤワン)の具(グ)や 添削
一屏風のおもて 忘あるさをおもてに云ふくちうごと云ふ 添削
一ひるまくち 枚(ヒラ)や 添削 一ひるまくち 翡翠(スイ)や 添削

一ひやくぶれ酒　百歩（ホ）ノ外、百歩ニ立（タツ）ル矢（ヤ）ハ、百歩ニ立ル矢ニ同（オナジ）

一もろこしの玄宗皇帝（ゲンソウクワウテイ）楊貴妃（ヤウキヒ）を寵（チョウ）して天下をうばひ給ひ例（レイ）なし。されば胡国（ココク）より起（オコリ）て漢土を乱（ミダ）れ

一百歩より内（ウチ）ハ矢（ヤ）ごろ

百官（ヒヤククワン）の座（ザ）を禁（キン）ず。禁中（キンチウ）も百官（ヒヤククワン）ござや

一もろこし　衣（キヌ）を催（モヨホ）す　催（ガホ）しや

一もろこし　詩（シ）のもやう　詩（シ）もろこしやう哥（ウタ）ござ

一扨（サテ）しござうの　此（コ）ほどと云（イ）ふござうござうきやうざうの

ちあると一歩（ブ）の中（ウチ）ゟ面白（オモシロ）ござ。面白（オモシロ）ござうござ

ささも(ささ)ぬ(ず)ま(ま)ま(ま)ま(ま

一もれくち〳〵かうこうろ拾せ　一拍のそ〳〵めろ　栞のこいうやうの
さいこいうもく云句せ　一拍ようおっすれい　ようそうろ山海
哥来つむ
あれいやせ　一もろこもにちろ山　大切山い行
和ろうあるとつへど・そい禁中れるをのろ
一もれぐろろぐろて　おろる仁へのくいくこいふを拍ぜこ云せ
一もろこ　裏云い袴着せ　一もこうふっく　更衣もうこ
ろこそ・同心元・蝟蜷　行貞　もこうふいく酔貞せ山ろそ毒この細元
一拍ろろげろ小栞をおぼこさて　お非安い栞をもって拍す
せ・不浄を不遠ねせ　一もろこもつれ門ろもうくせ
ますれ　漢家か教真例多野相云在納云世家西安た府い
下接群賢方毒吉華逃配ふ人毒勝計治白氏文集序を

一 れぐさ 物語を綴り出したる

一 文もなし 源氏学ぶ時 源氏信ずる

一 ものがたり 歌いぞき 管弦ある時などの

のち

一 ものがたり ありて

桓武皇 皇子 葛原親王のように 即位 実 ほど過ぎて 薨ずる

一 ものがたり 書のうちに 晋右軍 倫 金谷 春 満

林朝 仙 平里 障 逢春不遊 悲 愁人 天

一 ものがたり 家 大和物語 桃園 ものがたりて

月 日 物語 文指遣集 桃園 作 物語 第

院 物語 是 比 丸 一 ものがたり 文人擬生

文人 文 人 を 心 ものがたり 擬文章生と

云心ね。文人そて詩の試あるそや。在格の次第くをへてこゝろ心しや。
天子のおん前そも試る　一文人もろそ　平二聖文人ハ儒者也
そや生ハ今月及第ナンさんを云。き心ら好也　一もゞやうのうらゞ　文字指右也
所衣のうらハ
一もろこけうら高の関　菊多関　在奥州　サ将うらへ心ら。夕雪
の女の親よびやうをそうあそそうらへを。夕雪ね関のあ
うらゞれのひを。ゐゞ君ね淡ら名そもうらけうを恨てみうや。
夕雪みうらくもう高もうふ好りあ。けうらへがうらをうら給るや
若と
一もろうけうらへれうざう　淡海天皇のおん代ら弘仁八年ら男女の衣
服ら唐の法を用うをいくうら。ら心を家よいくう。河海図ら
一もえまれ行　萌ま木ね淡や　一もろうら落葉を　もろうゞ
さい菱を拾の枝ようけうをいくう。落葉いもろゞれ落葉や

多生
落濫腹や。名ハむつまじくとハ。女二女三ハ
まじ
一目連仏ちゝき 花 目連ゆて六道をそうろう。仏ちゝき
父母又仏ハ親近する心もそうや。そ母の餓鬼ハる落ろを救
ド
度をそうる。盂蘭盆経ハ説をそ
所ゐ物
もろ〳〵 本津香や 何いやもの字也
うら毎
一もれ物ろそ おゝて遣や 一もろ人 本三 本人也 何ハ体色。本人。
もろ
素をそうてのもや
一物へつゝを 素へ落ろんする。
物て物へもろ〳〵ハ何多し。物もそでのまにも父ちゝ母ハ
一もいぐ箱 何そん人かもあゐ。ものをそうろうもろて服の多
もろもや。それぐうる衣のを用心ろもそ

七

一宣命ともむらん 猶任のる処門の作を文これくちてうこのぶ
汝なる 一せうとこれみこれ文也み事内
ともいくも有ることべし 一せうく 兄をせうとく云也
一せうよくくみ せちくお角の心や
一せうよくくもくそけ 古文れ日られバ冬れ衣ぐの心や
一喜海波 輪墓ハ喜海波の序や いづれも辞あるも南宮謙
云ふ曲第和れ河 大池云良峯安世羽倭第勅命ト仮ル二ル
仮勅波成盤涉詞仮詠小野篁仮歌
一せうみづんのくんめやうる 感ま人くうくめくこ行るる
うくくと人くこれうる必あるべしこれ心や感ま人ハ漢高祖の
幸趙主如意のかや恵帝のたみそあるこをこんこせ

ども、つゐそうするずして、高祖は崩ずるの、恵帝位をつぎ
ゐて後、呂太后ふたむきのせんさうして、戚夫人の眼をぬきて、人彘
とみづけて、そこの中よりこゝろみてそれをしゝむ
史記曰呂后本執太后逐断戚夫人手足去眼煇耳飲瘖薬使
居厠中令曰人彘
一せんやう　せん陰とゝきてもせ
もやうとうむや、呼軟陰とあるて、幕のやうなるものよ、そこゝろ私なる
と云ふゝそ、陰ゝそ、一せんぐわ紐　昇下の紐也、或下帯
おびゝとも、紐のせうとゝと云也　一せんくゝる　宣ふぐゝも、俗ふ
作ぐゝしと云ふ
一せうくゝつそいゝ　次下ゝ関を
ゝそ、明名へ出あれいゝ、体系いゝ遠やうなるゝも
一せうそうまるゝて　遠遠也、あそぶ也せうそうと云也

一摂政しめし 表天皇れ元服の後もいまだ幼主の時は摂政と是
をいふ復辟の表をもてそうらうて君よ政をえし年後は摂政を
うけ給めて関白と稱して冷泉院十一ことれ元服ありて則れ位よつ
ありたまふ元服の後受禅の時摂政の例は清和貞観六年陽
元服ありし月八月九月忠仁公良房摂政の詔を蒙りし例に准ず
るやいかん六十三の年齢なれば忠仁公の例よりもいとさうらうやし
一せんしのむをえ宣旨れ名は今は摂政家ある昔は院なれ
もし名るべしれ敕の宣旨なれば名集れ中にもとうえしるを
一せきもうる大ごれしう 窮屈也除目四品籍よ内裏乃窮
者ありまするにもうえは大学の衣うえて年久うまう昇進なれ
ども心や 平家は昇平の初也窮途急 日本記

一せちゑ日うちのぞくしてうけしめて門のぞくしてうす
ハ白馬を引て左馬寮の馬を牽て供奉する儀式をうつしてうや
昔は多くうちを変えてうるハ良房公の時の例をもて代変えてうる
一小貳任ぐてく仁徳天皇四年始置諸国史仁明天皇嘉和元
七月勅諸国寺々云四年を限て限陸奥出羽太宰是云管
国始自筑前等遷在千里以五ケ年可為任限云
一せうそこいぐ文ちぐめてうぐ
一せうさいくと小饗 一せんぐうれぐんれもち
あされぐんのぐんぐんや此事をバ菜掩や云めちゃれ
べし 若鳥喪 一せうきもれぐうめ 集雅院
山籠のうちとや 一せんをいうちぐ 庭の礼拝也

又滝そなや山水もて紙をる給ふをさふる
一せんでよりもくぶの人音朱夷をいくぐる大将軍もの一ぐる猫あり
忠文といひし人音朱夷をいくぐる大将軍もの一ぐる猫あり
て清怯公の悪霊と吹てる孫を退治しるる。ふるのをぶんを
しってけるや何物
一せんゆうとういう猫 まれなや
地獄霊
一せうでんる 夕べ雲風思惟
一せんけうたる 何物かよいせんく
いとるるる。或いくいたるところ。髑髏夷たる善巧円念や耶修多羅く
日位髑夷や羅睺羅 羅睺羅い仏出家の後六年子生給しなる。
人るぐひるるる 元耶修多羅をば焚灯仏の時髑髏或女
と云なや。羅睺羅のつ多るひけるるる。別の因縁あ

ゑべきやうや。もつとも法衣舎利(シャリ)などいふもの。二条成光(ナリミツ)卿さうらふ。
とのゝたまひて。まことの化導(ケドウ)をさづけあひしは。我乃至(ナイシ)時雖(ジスイ)
もよ一我今成仏(ジョウブツ)之法乃法(ノホフ)みゝ得(エ)を説(トキ)くなりと。仏のたまふ
へきぞとおもふを。つゐにつたへさせたまふこゝろや
一せんらふ 四月の節(セチ)つ不歳時(フサイジ)ども
一せう川のたき おとさもあらばこそあるべし
一せうもんる 松門暁到月猶白(アカツキニイタリテツキナホシロシ) 民文集(ハイクンイ)といふ句
す
一すゝろ 何(ナニ)と人(ヒト)
一すゝろ 迷(マヨ)ひ清(キヨ)くいぐ心
一すゝろ 那(ソノ)の字や
一すゝろ 病曜(ビヤクエウ)吟。其人病九曜(ビヤクヨウ)の行度(ギヤウド)をもて。人の運命(ウンメイ)

一なるかや　てんもんぐうせのことをいう

一すりもさることづき　依理機とは内通家也　依すくにたつ

りやう　番匠のすごすごと心得也　何ほどもすごすごと

一すきごとぐも候　好色ざんもつふとさうなまさ

うれも理運也　一すいかん　なぐさみや

一すきれうと　ことをれうと心やし　嫌

一すきもの　好色の人也　一ずるやうといふのて　ずらうと出

うる事也　すきやうの結ぶのも縁といふ　国衙在国のう

ちをさうふまれや　人のむこ入也　のをいふ

一すこつき　すこづき　すこぐるうるべし

一すべるく　役るく也　一すくせ　さもくせも　宿世

一すべてごとく　すべき心もろもろや

一すべよりもろもろ　すべてやうすべや　もろもろもろもろ　ハんそうもろもろ

山のすや　せごるわてごとくもろもろ心の遠近（二ノ上）をもろもろや　金器（カナヲカ）

（スミ）景一なうそ　十め童をもろむもや

一すべろごそて　そごろそそ日かもろをつくろふそ心のうろ

れもる成べし　一すのそごろ拍　すれこそんもごや

ごろる心もすれこころくごをもろを

一すれうちこすれうちや　一すのひろ　そやしろをひ児

一ずごちよ　絢（ニエ）ずるやずごごをもずごごをそ

一すくくしく　もろれもるごをもや　すくろ日るや

一すくしちろひごへ　すしいわもるめや　手しれろびろ二そ

すべらぎ位さり給ひぬれば
一条摂政の行幸
一条摂院の行幸　一条摂院とは、おりゐの帝の御門のおとゝ
にやまします。一条第摂政四町を造れりとて、延喜の帝の御門
を一条摂院とぞ申す。宇多の御門とは、寛平法皇とぞ申す。十月の
行幸とは、もゝぞの賀のやうなるべし。春秋の行幸とてあるを
とてゝゝのたまふの行幸とは、いくちび寒の中行のやうを、知覧ぜんとは云
ふなり
一すゞろもの　知らぬ事をよろこぶ事につかふ
一すゞろ　いまだ見ぬ事をやすぐれの事や
一すゞろごゝろ　ほれ〳〵しき人をいふ
一すゞろよ　そゞろ風、心もとなきの心
一すゞろ　修法、行待などのやうに、ふとおもひたつ心

一すぐの　ものがたり　　一すべらみくろ　逸文(イツブン)歟(カ)

一すいびき　行幸(ギヤウカウ)　すべらぎ　すべらぎ

一すみこ　えんぎ(エンギ)　みまつりごと　あづかりし　ものがたり

一すべらぎ　すべらぎ(スベラギ)　あづけのこと　ものがたり

一朱雀院(スザクヰン)行幸　朱雀院(スザクヰン)のこと　延喜(エンギ)十六年三月七日行幸

雀院(スザクヰン)　宇多法皇(ウダホフワウ)　かく　云々(ウンヌン)　見えたり　あづかりの　書(カク)

一院(イチヰン)　ぎょう　則寛平(ノリカンピヤウ)　御門(ゴモン)　ぎょう　桐壺(キリツボ)の　女御(ニヨウゴ)　位(クラヰ)の中に　一院(イチヰン)　崩(ホウ)御

のこと　ぎょう　寛平法皇(カンピヤウホフワウ)　延喜(エンギ)　御門(ゴモン)　崩(ホウ)し　給(タマ)ひて　のち　くれ　給(タマ)ふ

一すさめ　不愛(スサメ)

一すもも　歟(カ)

人(ヒト)　を　離(ハナ)れ　給(タマ)ふ　れば

一すずろ河(カハ)　八十瀬(ヤソセ)　わたり

われ　いめ　れ　ども　す　ず　ろ　河(カハ)　八(ヤ)十瀬(ソセ)　渡(ワタ)り　給(タマ)ふ　者(モノ)　かな

一すべて此神ちかきひを河海に古語拾遺を引ていふ如
但告の神は往来のあとを留とり給ふ神功皇后新羅をせめ
給ひ筑紫の御帰るさ門司へ入れ給ひて祓ひ給ふ。あやし
き風吹てく吹ふうとよさくもあるべきにも但告の
神より初めふかめくつゐる神感あづかるも
一すいきんうつくしき人但人をあつふる如くし但人も忽人
ふるぶるべし
一すべの事は条理脱更大内
一すんぐわて巡流や盃の順
一すべてきいしも そもいは体なも
一すべて段ごとたゝこりひとさんん 小野篁が記よ。此もち
の比。月いとあかきよ招ぐとて此月いかゞまでと

人のいひさだめ　其を伺ふのごとくにて
一すべて寺社奉行　満雲女院崩御に依て諸興一般停止也
一すべて芝居　三座つゞく也　一すべて遊女　中ナ将の如也
一すべて此度の　伺書物に中納言の娘三人あり中に一人の文服
そすれる家づくさまざまんとて出立けるを　まく女郎服のも
のよふにみゆるをやすりぎぬにて　うつし絵のごとくにて
有　此娘ども皆芝居に出役なる故に伺書此度今象伺書
の娘どもの衣服をまねてあそれるといふ物そ　むかしの今様
ごとく成る伺なるゆへ　生半打ちおそろしく賑ふ心ばせなん
とも　一すべて　湯つけ也
一すべて　慢じ給ふ也

夜のうち
一すこしを過ぎれば丁ど深のかみ刻ごろ 分ダ 谷田も
一栗栖院のれ門あり これ筆の 夜のうちぞその
一すべて山を右のようにぞ 名今栗門典外典 美をとりて
深しとのべ 今此物語よりくだり 善恵仏人の修の奇夢を
しるすまでをもて一部とす 但そこころもとなし
元須弥山 ソメイロノサン 梵語 鹿よりの物語山 四宝を
もてつくりなせり 地より八方中間 地を出す八等合
て十六方中間の山あるにより 名づくる名 東西南北の四
別あり 日月の山の中腹をめぐりて 晝夜を照すといえり 名人
名の義 石之のまわりをめぐる夜の義 ぐるりくるをあ
るいていくく須弥の山山をそういうべきなり 右のあるさく

ふるさとにかへさびおもつてさうしのうへをみめぐしこゝろのれんそう
月日をそこもろいは月の中宮日の本宮こたもつれいはの名よのれん中一
宮よろづ除よ事宮をまもりさせ給へこうくいこゝろのうちこそ
そこなひたまへとこいはの石のうへ世代のごとく常宝をしさかえん
ありれいのれ他をかこさるをひろうあそこいはひろ心をいのろ
き海こうくをこいを事つゝしみ信ようきゝて四海をふん
にいこゝろをめぐる心や我房いちいこれみのうて西をさして切
八万般若のまよ揮さして生死の海を渡て西方極楽に参よ
いろくをにこふ現当二世共願をや給へ南無阿弥陀仏一こよ
や善恵仏人の前よ頂弥日月をとをくるうは善光佛一こよ
もてあそをくうさうろ心お遠そとこくれ各もれもも

かゝるの水鳥をゝゝいおせ(ヨツセ)れ利益(リヤク)こゝちあらんにてもとゝうべきや。仍略ス

一住吉(スミヨシ)社(ノ)神官(カンヌシ)津守(ツモリ)国基(クニモト)寛平(カンヒヤウ)年中(ネンチウ)ニ勅(チヨク)ヲ奉(ウケ)テ住吉(スミヨシ)ノ神(カミ)ヲ勧請(クワンジヤウ)シ奉(タテマツ)リ摂津(セツツ)国(ノ)東成(ヒガシナリ)郡(コホリ)ニ一社(イツシヤ)ヲ建(タテ)テ祭(マツリ)ケリ。其(ソノ)後(ノチ)国基(クニモト)ノ子孫(シソン)津守(ツモリ)氏(シ)ノ人(ヒト)代々(ヨヨ)相(アヒ)伝(ツタヘ)テ神主(カンヌシ)ト成(ナリ)テ今(イマ)ニ絶(タエ)ズ。

一住吉(スミヨシ)ノ神主(カンヌシ)津守(ツモリ)氏(シ)ノ系図(ケヅ)ニ云(イハク)。仲哀(チウアイ)天皇(テンワウ)九年(クネン)己亥(ツチノトヰ)ノ歳(トシ)神功(ジングウ)皇后(クワウゴウ)新羅(シラギ)ヲ征伐(セイバツ)シ給(タマフ)ノ時(トキ)。御船(ミフネ)ノ艫(トモ)ニ居(ヰ)給(タマヒ)シ表筒男(ウハツツノヲ)中筒男(ナカツツノヲ)底筒男(ソコツツノヲ)ノ三神(サンシン)ハ。和魂(ニギミタマ)ヲ分(ワケ)テ摂津(セツツ)国(ノ)住吉(スミヨシ)ノ郡(コホリ)ニ鎮座(チンザ)シ給(タマフ)。荒魂(アラミタマ)ヲ分(ワケ)テ筑紫(ツクシ)ノ国(クニ)ニ鎮座(チンザ)シ給(タマフ)。

一住吉(スミヨシ)ノ社(ヤシロ)ハ。神功(ジングウ)皇后(クワウゴウ)ノ御時(ミトキ)ニ始(ハジマ)リ給(タマヒ)シ事(コト)ハ。日本紀(ニホンギ)ニ見(ミエ)タリ。

一住吉(スミヨシ)ノ神主(カンヌシ)ハ。津守(ツモリ)氏(シ)ノ人(ヒト)代々(ヨヨ)相伝(アヒツタヘ)テ神主(カンヌシ)ト成(ナリ)テ今(イマ)ニ絶(タエ)ズ。

一住吉(スミヨシ)ノ神主(カンヌシ)津守(ツモリ)氏(シ)ノ系図(ケヅ)ニ云(イハク)。仲哀(チウアイ)天皇(テンワウ)九年(クネン)己亥(ツチノトヰ)ノ歳(トシ)神功(ジングウ)皇后(クワウゴウ)新羅(シラギ)ヲ征伐(セイバツ)シ給(タマフ)ノ時(トキ)。御船(ミフネ)ノ艫(トモ)ニ居(ヰ)給(タマヒ)シ表筒男(ウハツツノヲ)中筒男(ナカツツノヲ)底筒男(ソコツツノヲ)ノ三神(サンシン)ハ。和魂(ニギミタマ)ヲ分(ワケ)テ摂津(セツツ)国(ノ)住吉(スミヨシ)ノ郡(コホリ)ニ鎮座(チンザ)シ給(タマフ)。荒魂(アラミタマ)ヲ分(ワケ)テ筑紫(ツクシ)ノ国(クニ)ニ鎮座(チンザ)シ給(タマフ)。

一住吉(スミヨシ)ノ社(ヤシロ)ハ。神功(ジングウ)皇后(クワウゴウ)ノ御時(ミトキ)ニ始(ハジマ)リ給(タマヒ)シ事(コト)ハ。日本紀(ニホンギ)ニ見(ミエ)タリ。

一住吉(スミヨシ)ノ神主(カンヌシ)ハ。津守(ツモリ)氏(シ)ノ人(ヒト)代々(ヨヨ)相伝(アヒツタヘ)テ神主(カンヌシ)ト成(ナリ)テ今(イマ)ニ絶(タエ)ズ。

一住吉(スミヨシ)ノ神主(カンヌシ)津守(ツモリ)氏(シ)ノ系図(ケヅ)ニ云(イハク)。仲哀(チウアイ)天皇(テンワウ)九年(クネン)己亥(ツチノトヰ)ノ歳(トシ)神功(ジングウ)皇后(クワウゴウ)新羅(シラギ)ヲ征伐(セイバツ)シ給(タマフ)ノ時(トキ)。御船(ミフネ)ノ艫(トモ)ニ居(ヰ)給(タマヒ)シ表筒男(ウハツツノヲ)中筒男(ナカツツノヲ)底筒男(ソコツツノヲ)ノ三神(サンシン)ハ。和魂(ニギミタマ)ヲ分(ワケ)テ摂津(セツツ)国(ノ)住吉(スミヨシ)ノ郡(コホリ)ニ鎮座(チンザ)シ給(タマフ)。荒魂(アラミタマ)ヲ分(ワケ)テ筑紫(ツクシ)ノ国(クニ)ニ鎮座(チンザ)シ給(タマフ)。

一住吉(スミヨシ)ノ社(ヤシロ)ハ。神功(ジングウ)皇后(クワウゴウ)ノ御時(ミトキ)ニ始(ハジマ)リ給(タマヒ)シ事(コト)ハ。日本紀(ニホンギ)ニ見(ミエ)タリ。

一住吉(スミヨシ)ノ神主(カンヌシ)ハ。津守(ツモリ)氏(シ)ノ人(ヒト)代々(ヨヨ)相伝(アヒツタヘ)テ神主(カンヌシ)ト成(ナリ)テ今(イマ)ニ絶(タエ)ズ。

69038
6AP 18